
その名も嘘つき勇者様

瀬田一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その名も嘘つき勇者様

【Nコード】

N7863X

【作者名】

瀬田一郎

【あらすじ】

物心がついた時から塔に閉じ込められていたお姫様は本でしか見たことのない外の世界に憧れ、いつしか外の世界に出たいと願った。そして物語が始まるあの日、外の世界に連れていってくれる勇者様が願いを叶えてくれた。二人を繋ぐのは「嘘」と「秘密」。それが破られた時、二人の運命は。ハートウォーミングなお話。一応、中盤からハーレムになる予定。本格異世界ファンタジー。

プロローグ（前書き）

エレン領にある小国。王女は塔にとらわれて遠くに見える自分の生誕祭を窓から覗いていた。すると近くにある時計台の屋上に人影が王女に手を振っている姿が見えたところから物語は始まる。

プロローグ

「高い塔に閉じ込められたお姫様を助けるのは勇者様って決まってるんです」

「あんな…俺はお前に頼まれてここへ来たんだぞ？」

「はい。知っています」

キラキラとした瞳で塔より少し低い時計台の屋上にいるレオンに視線を送るお姫様。

困り顔の推定、勇者様は仕事の依頼書を胸のポケットから出してお姫様に見せるために広げて持ち上げる。

「ほらッ。お前のサインだろう？」

「はい。それでも勇者様でしょうか？だってその格好はどう見ても勇者様ッ」

「あんな…遠くに見える演劇に紛れて城へ潜入したんだ。カナリアの巫女っていう演目知っているか？」

「知っています。本で読んだことがあります、その格好はアルドリア様の格好じゃありませんか？」

「そうだけとお前を助けるために脚本を変更して勇者の出番は頭とラストの約束の地へ連れて行く部分だけなの」

レオンは依頼書をポケットに乱暴に押し込みながら遠くに見える舞台を指差した。

移動演劇団「シアテイル」が姫様の生誕16周年を祝う感謝祭のメインイベントの劇を行っている最中で観客はその劇に夢中だった。

舞台ではレオンの兄のテッドが扮する仮面の騎士が勇者と巫女を守る為に敵軍へ単騎で突っ込む前の長台詞のシーン。

「クライマックスまで時間が無い。終わりの戦闘シーンの演出で花火が夜を彩るからそれに紛れてお姫様を抱きかかえて走ってアルファレスへ乗り込むんだ」

「アルファレス？」

「そう。俺らの移動飛行艇だぜ。中はちょっと狭いのが難点だが塔の中よりは広いと思うぜ」

「はい。この塔は狭くて苦しくて自由がありません。何をすることも執事を通さなければなりません」

「…あのさ、だったらこの依頼書も執事を通したのか？」

「はい」

「何だろうな…一気にやる気を失くしちまうぜ。セキュリティの甘いのか、執事がお前を自由にさせたいって思っているのか」

大げさにため息を吐いて肩をすくませるレオン。

舞台下の奈落から中庭の真下を通る水路を抜けて時計台の複雑な内部のからくりを通ったのがバカらしく思えるとやはりため息は深くなる。

その様子を見て具合でも悪いのですか？と訊ねる純粋な瞳のお姫様にレオンはゆっくりと首を横に振った。

「まあ仕事だからなッ。嘆いている場合じゃない」

「はい。では私はお待ちしております」

「待つ？お前が来るんだ。時間が無い。ほらッ」

「ほらって！！こんなにも高い塔から飛び降りるとおっしゃるのですかッ?!」

「仕方ないだろう？魔法を破る時間も無い」

レオンは両手を広げて受け止めるジェスチャーをする。

塔と時計台は隣接しているとは言っても数メートルの距離はある。

そして高い位置にあるせいで風が強い。レオンの金髪も風にあおられて逆巻いていた。

ためらっているお姫様に早くしろ、とも言えずに時間だけが過ぎていく。長台詞が終わる合図の長剣を頭上に掲げる姿に歓声が沸いていた。

「だったら…あの台詞を言ってください!!」

「はあ？」

「あの…アルドリア様が幽閉されていた巫女を救いだす時に言ったあの台詞をッ」

(何だ…こいつは…)

「お願いします!!そう言われたら私も勇気が出そうなんです」

「だって俺は勇者じゃねえし俺が言っても嘘なんだぜ。劇で涙を流す奴らの気がしれないぜ」

「嘘?違います!!あなたは勇者様です」

「だから…これは衣装だつての…ああ!!もっつ」

レオンは進まない話に苛立ちを募らせる。強風にあおられるうっとおしい長い髪も無駄に装飾してある重たいだけの鎧も聞きわけのない女も大嫌いだった。

だがどれもやらなきゃ生きていけない。親方のマウルには世話になっっているしここは居心地が悪くない。仲間との関係もまあまあだ。そうレオンは自分に言い聞かす時間を挟んでようやく言う気になった。

跪くレオン。肩腕を斜めに下げて自分を紹介しながら共に来てくれませんか?と言ったたったそれだけの台詞。

「ダメッ!!もっとちゃんとやって下さい」

「あのなッ…」

何か言い返そうとしたレオンに注がれる期待する視線。立ち上がろうとする足を止めてもう一度、きちんと跪いた。

「怖がらないでください。私の名前はアルドリア。かの国から精霊の力を借りてここまで旅を続けております」

「精霊の力…？」

「はい。この火の精霊クーパーに水の精霊セイラム。土の妖精ハイドに風の精霊シーアテイルに導かれてあなたを助けに参りました」

本来の舞台ならば魔術師がそれぞれの精霊の名前を呼び時に魔法を詠唱し、勇者の背中越しに精霊がほほ笑むという演出がある。

その間をたつぷりと費やしてレオンは立ち上がり、塔にいるお姫様へ手を伸ばした。

「行けません…私は外の世界が怖い…」

「怖い？精霊の加護があればどんな場所にいたとしても恐れることはありません」

「無理です。外の世界はとても怖い場所だと聞いております」

「恐れることはありません。ここへいる精霊をご覧ください。彼らは怖いでしょうか？」

「…いいえ。とても優しくほほ笑んでおりますわ」

「そう。世界は彼ら四つの精霊からなる素質で作られています。いわば彼ら自身なのです」

「理屈はわかります。でも怖いものは怖い…。私は生まれてからずっとここで暮らしてきました。今更ここを出るのは怖くてなりません」

「知ることを恐れてはいけません。ここにいれば何も変わることはありませんが何かを手に入れることは出来ません」

「失うこともありません」

「確かに失うことは何もありません。それは何も持っていないからではございませんか？」

「何も…持っていない？」

「そう。あなたは何も持っていない。だからこそ何かを手に入れることを恐れるのです。あなたはあの花の匂い？あなたは風に触れたことがありますか？あなたは恋をしたことがありますか？」

「恋…？」

「あなたは美しい。この私の胸に宿るこの気持ちをあなたはまだ知らない。この心は世界をより美しくしてくれます」

「美し…く？」

「そう。あなたの瞳には世界は平凡で退屈で窮屈に見えているはず。私の手をとってくれるのでしたら私が見せましょう」

「美しい世界を？」

「はい。怖がらないでください。あなたはそつと私の手を握るだけでいいのです。そうしてくれば私があなたを守り続けると約束をしましょう」

「守ってくれる？」

「さあ手を伸ばしてください。もしも世界があなたを不安にさせるならば私はその全てと戦いましょう。そして必ず勝利をおさえめて見せましょう」

「…アルドリア」

「カナリア様。私はずっとあなたの傍におります。あなたを守る為に私はいる」

台詞はここまでで終わる。

最後は巫女が自らの手でアルドリアの手をとって旅が始まるというシーン。共に行きましょうって言えばいいじゃないか、と激昂した稽古を思い出すレオン。もうずっと前の話だ。

何度も行っている演目で一番の人気を誇る物語。特に女性からの

人気が高くこのシーンをする度につつとりと恍惚した表情を浮かべるのがレオンには不思議だった。

「アルドリア様ッ!!」

「ッ!!もつとゆっくりと落ちろってんだよ」

窓枠に足を乗せて勢いよく飛び降りてくるお姫様を慌てて受け止めるレオン。

勢いを殺す為にお姫様を抱いてからグルッと身体を回して時計台に立たせて手を離すと腰が抜けたお姫様がゆっくりと崩れていく。

「怖かった…」

涙顔になり呆然と塔を見上げるお姫様。窓には魔法人形がいてお姫様にお別れを言うように手を振っていた。

「魔法人形か…」

「シルクくんです」

「シルクくん？」

「名前です。人形じゃありません」

「はぁ…お姫様つてのも大変なんだなッ」

レオンは苦笑いで視線を魔法人形から震えるお姫様に戻した。

「ほら、首に手を回してジツとしているよ」

「はい。アルドリア様」

「アルドリアじゃねえんだよな…俺の名前はレオンってんだ」

「レオン？素敵な名前ですね。私はアスハ・レイチエル・フラン・フィールランド・オルト」

「なげえよ。どれが名前かわからなねえけどフランでいいか？」

「フラニーって呼んでください。カナリアもリアって呼ばれております。愛称っていうのでしょうか？」

「まあ…お前がそれでいいならフラニーって呼ぶぜ。俺はレオンでいい。他の仲間は後々説明するからな」

「はい」

フランの細いウェストに手を回すと震えていることが指先に伝わってくる。しっかりと抱きしめて耳元で首に手を回せ、と離すなよと釘をさした。

レオンの言った言葉を何度も繰り返しているフランに不安を覚えながらも抱きかかえて立ち上がる。やけに軽くて言いようのない気持ちになった。

見上げる塔。一部分しか見えていないがロクに運動が出来るスペースなんてあるとは思えなかった。円形の塔で幅も十メートルも無いただろうと思っていると魔法人形が力を失って倒れた影が見えた。

「もう演目も最後のシーンに入りますよ」

「そうだな。急がないといけないぜ。走るからただ黙っているよ」

「はい。レオンが守ってくれますもんね」

「ああ。何があるうと守ってやるよ」

レオンは半ばあきれながらそう言って時計台の屋上から複雑なからくりがある内部へと続く階段を降り始めた。

時計台内部

時計台を降り終えて水路に入る。下水道ではなく庭にある池を管理する水路なので二オイはあまり無いと思ったがフランには厳しいみたいだった。

「大丈夫か？」

「…はい」

「二オイはキツイよな。慣れちまった俺でも嫌な気持ちになるぜ」

「いえ…二オイじゃなくて」

言葉を言い終わる前にレオンの首に巻き付く腕が力づよくなった。水路の低い天井には妙な圧迫感がある。声が反響するのも慣れなければ怖いと感じる奴もいる。衣装を担当するヤーミンも暗くて狭いところは嫌だつて泣いていた。

レオンは少し速足で水路を抜けようとするが、足音が反響し気付かれるとまずいので気持ちだけ速く歩くようにした。

「水路つてのは舞台裏と繋がっているんだ。そこから船に乗るには舞台を通らなければならぬんだ」

「オルト平原ですね。エレン領とノール領のちょうど真ん中に広がる広大な草原で魔術師と兵士が戦います」

「そう。兵士達が精霊を閉じ込めていたのを姫と勇者で解放するんだ。その最後の封印を解く遺跡を守る為に魔術師達は兵士と戦うんだ」

「知っています。魔法を使えなくて剣と楯で戦うんですよね？」

「魔術師が見よう見まねで戦って兵士と互角つてのが気になるんだよな…って思わねえ？」

「大切なものを守るためには誰もが素晴らしい力を発揮出来るとそ

う書いてありました」

「小説や伝記にはだろ？現実には毎日訓練する兵士と魔法で何でもしてしまう魔術師が互角つてのがね…どうしても気になるんだよな」

愚痴っぽく言うレオンにいつしか熱が入るフラン。

本で得た知識や物語のシーンを熱く語ると次第に首に絡まる腕は緩まってきた。作戦は成功つてところかな？とレオンはほほ笑んだ。

「何を笑っているんですかッ！！」

「いや何でもない。本が好きなんだなつて思つてさ」

「本は好きです。私にもらえる者と言えば本だけでしたから」

「そりゃ魔術本と物語なら物語だよな」

「魔術本は一度も読んだことはありません」

「読んだことが無い？だつたらあの魔法人 じゃなくてシルクくんはどうやって動いているんだ？」

「だからシルクくんはシルクくんですつてばッ！！」

誰かが監視目的で人形を置いたのかな？とレオンは推測する。手紙も執事を通したと言っているし莫大な賃金ももらえたと親方は笑っていたことを見てもこれは黙認されているものと考えられた。

塔に閉じ込められている理由も知らないが可哀そうだと思つて柄の間の自由を与えてやろうという親心だと解釈するレオン。

「聞いていますかッ？！私は大切な話を」

「聞いているよ。悪いな。シルクくんはシルクくんだな。お前をずつと守ってくれていたんだから感謝しなきゃな」

「シルクくんは私の友達です。カナリアで言うところの精霊のマップです」

カナリア姫が幽閉されていた部屋にいた精霊のマップとはネズミ

やりスなんかをファンシーにして丸くしたような感じの生き物で常にカナリア姫の肩に乗っていた。

塔で見たシルクくんは毒地や鉋山の奥で作業する時に使われる魔法人形。フランよりも大きく単調な命令しか理解できないはずだ。

「大きさは全く違うけどな」

「大切なのは気持ちですよ。マップのようにシルクくんは私にとって大切な友達なのです」

「友達を置いてくるのか…良かったのか？」

「大丈夫です。執事にお手紙を書いておきました。シルクくんを大切に扱うように、と」

「それなら大丈夫だな。まあ一緒に連れていくのも無理だろうしいい判断だ」

レオンが寝めると顔を赤らめて喜ぶフラン。

子供のように無邪気な笑顔で鼻歌でも歌いだしそうだったのが可愛くなって思ったレオンもつられて微笑み返す。

いい雰囲気が続いている。この調子なら水路は何事もなく抜けられる。話している間にもう舞台からの光がもれて見えている。

「舞台の光だ…顔は見せるなよッ。見られると演劇を止められるかもしれないからな」

「はい」

「じつと抱きついていて。少しゴタゴタした場所を通るからなッ。外の音も気にするな。戦闘する声や音も怖いかも लेकिन大丈夫」

「はい。守って…守ってくださいますもんね」

「あ…ああ…！」

あまりにも綺麗な瞳で言うものだから調子が狂いそうになるな、とレオンは心中で言っただけ光を睨みつけた。

頭の中で何度も繰り返した戦闘シーンを思い返す。出たすぐに歓声が沸いて親方が扮する兵士に見つかる。ゆっくりと全体を見渡して台詞を言って戦いながらゆっくりと袖へはけていく。

袖に隣接してあるシーアテイルの楽屋にフランを置いて代役のミレイを抱きかかえてまた舞台へ戻り、約束の地の件をして舞台が終わる。瞼の裏で拍手する観客が見えて胸がトクン、と高鳴った。恥ずかしいが悪い気分じゃない。

酔いしれるほどの演技じゃないが勇者に選ばれた人だけがもらえる歓声と拍手。栄光の光が幕に閉ざされるまでは勇者だけを照らしている。

「…すごい歓声が聞こえる」

「もう少し近づくと歓声も消えて剣がぶつかる音や演者が叫ぶ声の中を通る」

「緊張しますね」

「緊張？」

「初舞台ですもの。ずっと夢だったんですよ」

「夢…か。顔を出せないのが残念だけど舞台は悪くないぜ」

「はい。私はきつといい演技をします」

「自信家だなッ。ハハハ」

レオンが大きく笑うとフランもつられて笑った。

「行くぜ。舞台だ」

表情をふつと戻して厳しい顔に戻るレオンが光を抜けて舞台へと立つのであった。

舞台

「アルドリアッ！！」

舞台の奥に作った遺跡のセットから出てくるレオンに剣をかざして叫ぶ親方扮する兵士長ガザン。遺跡の足元には魔術師の格好をして剣と楯を持つ人間が扇状に広がって遺跡の入口を守っていた。

「封印の解放は終わった」

「何だとツ？！そんな…バカな…」

「もうお前達が戦う理由も無い。剣を収めよ」

「クッ…そんな…」

ガザンは剣を落とし、膝を折って前のめりに倒れる。

それを見て魔術師も戦っていた兵士も剣を落としてレオン扮するアルドリアを複雑な表情で見上げる。それぞれの表情を見渡す。

ほんの数秒だが、舞台の上では数分にも思える沈黙。腕の中にあるフランの小さな胸が高鳴っているのがレオンの身体に伝わってくる。

「引け！！ノアールの兵士よ」

「…巫女様は」

「腕の中にいる。私がこの手で約束の地へと連れていく」

「…」

「引け！！これ以上の争いに何の意味がある」

レオンが叫ぶとガザンは顔をあげて剣を支えにしてゆったりと立ち上がる。

「それは出来んツ」

「何ッ！もう終わったということがわからないのかッ」

「わかっている。だがッ…だがッそれでも私には兵士長としての誇りがある」

「部下の命と誇りを天秤にかけると言うのかッ。愚かな」

「若い兵士も同じ心でいる。我が国、ノアールのためでなく一人の兵士として引けぬッ」

ガザンがそう言っつて遺跡へと走り始めると再び戦闘が開始された。それに合わせて照明も音楽も変わり花火も打ちあがり静まり返っていた客席からも歓声が続いた。

(行くぞ。いいか？しっかりつかまっているよ)

腕に抱きつくフランにしか聞こえない声でつぶやいてから舞台へ降りる階段をゆっくりと降りた。

魔術師に守られながらも何故かゆっくりと戦地を歩く演出に涙する客もいた。こうというのがバカらしいんだ、と思ったレオンだが表情は崩さずに真剣な顔で歩みを続ける。

魔術師を倒してレオンへ襲いかかってくる兵士の一太刀をかわして剣で胴を薙ぐ。倒れる兵士が巫女へ手を伸ばそうとして息絶えた。狭い舞台だが襲いかかってくる兵士を払っていくので数分はかかる。

そして最後はガザンが目の前に立ちただかる。

「退いてくれッ！！」

「退けぬ」

「だったらこの剣でお前を斬る」

「斬れるものならば斬ってみせよ！！ノアール最強の兵士を倒せぬならば巫女様を守り続けることなど出来んわッ！！覚悟せえ」

ガザンは幼少期の巫女を守る護衛役としていたこともあり、思い入れが特別にあるという設定だった。

掛け声と共に斬りかかるガザンのわき腹を斬って、その背後でガザンが巫女の名前を呼んで倒れてこのシーンは終わりだ。

ガザンが倒れる派手な音が背中に聞こえて剣を捨てて舞台袖へと入る。

客席の興奮もピークになり、割れんばかりの拍手と声援が鳴り止まなかった。

「終わったぜ。ここはもう楽屋になる」

「…ふう。かなりドキドキしました」

「初舞台なんだ。緊張して当たり前さ」

「ど、どうでしたか？きちんと出来てましたか？」

「ああ。才能あるぜ」

ニッコリとほほ笑むフランを楽屋の椅子へ座らせるレオンへフラシと同じ格好をしたミレイがつかつかと近寄ってくる。

「ずいぶん仲が良さそうねッ！！」

「出番が少ないからって怒るなよ」

「だって！！せっかくの巫女の役なのにどうして今回だけ違う構成なのよッ！！これじゃ主役はテッドみたいじゃない」

「確かに兄貴ばかりのシーンが多かったがすねるなよ。今回は作戦が同時進行なんだぜ」

「わかっているわよッ」

表情を強張らせるミレイは横目でフランを睨む。フランは怯えながらも笑みを浮かべたがそれも無視するミレイ。

「八つ当たりだぜ」

「わかっているって言っているでしょう。もうセットの組み替えも終わるから行くわよ」

「あいよ。見せてやるうぜ。最後の名場面ってやつをさ」
「言われなくても」

何とか機嫌をなおそうとするレオンを突っぱねるミレイはレオンを通り過ぎて薄暗い楽屋の隅にある全身鏡で自分の姿をチェックしていた。

鏡の上部には小さなライトがあって顔に影が出来てしわに見えるのが嫌だわ、と嘆くミレイの背後でその背中を見つめるフランの前へ跪くレオン。

「少しだけ離れる。すぐに帰ってくるから心配するなよ」

「はい。大丈夫です」

「ああ。その笑顔を忘れないでくれよ。何処かの誰かさんみたいに怖い顔をしているとしわが出来るぜ」

フランはふっと笑うと鏡越しに聞こえているわよ、とミレイが返事をしてくる。

グツと堪えてレオンを見つめるフラン。レオンは約束だ、と言って立ち上がりミレイの隣へと並んだ。

遠くにいつてしまうようで不安になるフランは手近にあった柔らかな人形を胸に抱き寄せて顔を沈めたのであった。

セツトはアナンの滝をみおろせる展望台に変わる。

実際にあるアナンの滝は足元に広がる穴は直径100メートル。

底が見えなくて地球のヘソとも呼ばれていた。

そこでアルドリアと巫女は別れることとなる。全ての封印を解放し終えた精霊がこの場所に集まり、この穴へと吸い込まれることで地球と同化すると言われている。

「アルドリア…精霊が綺麗ですね」

「あなたに解放された喜びで精霊達も輝きを増しているように見えます。私が精霊の加護を受けた時よりも力強い精霊の力を全身で感じます」

「そうですね。これで全ての旅が終わります。あなたともここでお別れですね」

「私がお守り出来るのはここまででございます」

その返答に表情をくもらせる巫女役のミレイ。

本当はずっと一緒にいたい、と言えないでいる巫女と同じ気持ちなのだが離れなければならぬ運命を受け入れたアルドリアの別れのシーン。

旅は精霊の解放すること。それが終われば共にいることは叶わない夢であった。

理由は一つ、巫女には精霊と共にこの世界を守らなければならぬということだった。人間でありながら精霊となる巫女が人間である部分（アルドリアと共にいる自分）と決別しようとするシーン。

「本当にあなたに連れられて外の世界へ来て良かった。花の匂いも風の冷たさも…人々の温かさも知りました。決して本ではわからない現実もこの目で見る事が出来ました」

「はい」

「ありがとうございます。あの時にあなたに外へ連れられ無かったのなら私は一生部屋の中が全てだった」

「…そう言ってくださることに感謝いたします。巫女様」

「巫女様：最後まであなたは名前でも呼んでくれませんでしたね」

悲しそうに笑うミレイを複雑な表情で見つめ返すレオン。

アルドリアはわからないが、いつもテッドならこう言った表情をするので真似をしていた。

ノール領では主役をやりたがるテッドもエレンでは顔を見せたくないと言って代役をさせられるレオンの演技は常にテッドの真似をしているに過ぎない。

「名前を呼んでももらえませんか？アルドリア」

「…それは出来ません」

「どうして？あなたは私の知らない世界を教えてくださいました恩人なので」

「…理由などいつの間にか忘れてしまいました」

「もうあの日、あなたが外の世界を教えてくださいました日から一カ月も経ちますものね」

「私は何もしておりません。言うなれば運命があなたを導いたのでございます」

「運命：精霊や魔術師と同じ言葉で私とお話するのですね」

レオンはその言葉に隠した感情をかみしめるように沈黙で答えた。精霊の光が強くなって催促をしているように点滅している。それを横目にミレイは目を閉じてください、と言った。

その言葉に目を閉じるレオン。

ゆっくりと近づいてくるミレイの足音がレオンの目の前で止まった。

「あなたとはもつと一緒にいたかった。あなたともつと多くの世界を見たかった。あなたとずっと一緒にいたかった」

レオンがゆっくりと目を開けると目の前にいたミレイが背伸びをしてレオンに口づけを迫っていた。

唇を重ねる二人。身体を抱き締めようと葛藤しているとミレイが一步下がってほほ笑んだ。

「それだけで私は嬉しい。離れても心はずっとあなたと一緒にいます」

精霊の光がミレイの身体へ注がれた。レオンの立ち位置からすれば見えているが、観客席から見ると光の屈折の関係で姿が消えて見える。

一人残されたレオンは光へ触れようと手を伸ばすと光が消えてしまふというシーン。

光で見えなくなっている隙に足元の装置が沈んで舞台裏へ入れるようになっているのだが、急ごしらえで作った舞台にはそんな装置は取りつけられていない。

今回は光へ手を伸ばしている間に幕が下りて演劇は終了となった。拍手や喝さいが鳴り止まない舞台は大盛況の内に幕を閉じたのであった。

シーアテイル船内

全てが終わり楽屋へ戻るレオンとミレイ。

楽屋には全ての舞台関係者が親方を中心に集まってフランも親方の隣でその輪に加わっていた。

「今日もいい演技だった。目的のお姫様も奪還出来た。後は逃げるだけよ」

「逃げるって…何だか嫌な言い方だぜ」

「いいんだよ。もうこの街へ二度と来ることは無いんだからよ」

「はあ？何でそうなるんだ？」

「一国の姫様を誘拐したんだ。それなりの覚悟はしておけよ」

「お姫様を誘拐って相手側も知っているんだろう？だったら別に…」

「甘いナツ。知っていたとしても黙ってお姫をさらわせると国の面子に関わるだろうがッ。ドタバタと逃げる姿を見せればこの国の面子も守られるってもんだよ」

ガハハ、と大柄の身体を揺らしながら笑う親方に引き気味のフランだった。

周りにいる演者も人種こそバラバラだが特別小さな人間ではない。だが親方は全員の倍以上の大きさがある巨人族の生き残りだった。

このシーアテイルに乗っている全員は何かの生き残りだったり見世物小屋から引き抜かれたいわゆる普通じゃない人間達だった。

見た目もモンスターに近い人間もいるがこの船では普通に暮らしていた。それも親方の人柄のおかげだとテッドは言っていた。

テッドとレオンも特別な人種とやらでテッドがエレン領で顔を出したくないと言う理由もそこにあった。

見た目は人間そのものなのだが、瞳の中に白い輪がありエレン領では悪魔が宿る肉体と言われて忌み嫌われていた。逆にノアール領

にいけば精霊が宿る神聖な肉体と呼ばれている。

そんな他人からの感情を気にしないレオンは感受性が違うんだ、という親方の言葉に妙に納得している。テッドは小さな時から人目を気にし過ぎている気がする。

「それで水路を通って隠れて連れだしたわけね」

「堂々と明け渡してどうするッ。小さくとも王位継承権が低くともこの国のお姫様であることに違いはない!!」

「何処の国も面子が大切ってことね。あー嫌だね」

「それがあるおかげでこっちはいい仕事をさせてもらってるんだ。ガハハ」

親方はポツテリと出たお腹をさすって豪快に笑った。

「だったらこんなにダラダラと出ていいのかい？今頃、兵士達は大騒ぎじゃないか？」

「もうそろそろ合図が来る。城下町を回るパレードがいいところに来た時に火花があがる。それがくれば一気にこの船を空へ飛ばすぞ」

「片付けもしてねえのに？あぶねえよ。人だっているんだ」

「安心しろ。パレードを見る為に人はいない。あるのは舞台だけだ。どうせなら派手にぶっ壊して空へ逃げてやろうじゃないか」

派手なことが好きな親方らしいプランだった。目立って悪党に徹しろ、というのが奪還屋稼業での鉄則らしい。

悪党になれば好奇心で客入りが増えて演劇の方も潤うし一石二鳥だと胡散臭い話を耳が痛くなるほどされた。

「それじゃ持ち場へ戻れ。船を動かすぞ」

生返事でいつもの銃座席へ向かおうとするレオンの肩に手を乗せ

無理やり振り向かせる親方がフランの背中を押した。

「今日はこの子の面倒を見るのがお前の仕事だ。案内をしてやれ」
「あーらレオンにびったりな仕事ねー頑張ってるね。ゆ・う・しゃ・さまー」

バカにするようにレオンの脇を通り抜けるミレイ。

親方に背中を押されてバランスを崩しかけたフランの身体を抱きとめた姿を見て親方は満足そうに笑って部屋を後にした。

残された劇団員も持ち場へとダラダラと移動していく中、二人はどうすればいいのかわからないままにまごまごとしていた。

「とりあえず…あの大きいのが親方だぜ」

「はい。とつても大きい方ですね」

「そう。それで口が悪いあいつがミレイ。そして今部屋を出ようとした仮面の騎士がテッド」

「さっきあいさつさせてもらいました。優しい人ですね。レオンさんと兄弟なんですよね？」

「そうだよ。背が高くてカッコいいのがテッド。ちんちくりんのライオンヘアなのがレオンってね。覚えやすくていいだろう？」

「ふふふ。飾らない人なんですね。レオンさんもとってもカッコいいです」

「照れるなツ。ハハハ」

テッドはその様子を遠くで見ている。背が高く黒髪の長髪で顔立ちも似ても似つかない。ただ瞳の中にある白い輪だけが兄弟だということを教えてくれる。

レオンがテッドと目が合うと無表情で部屋を出ていくテッド。女好きで誰にでも優しい兄だが、エレン領の人とは極力接することを避けている。嫌な思いをしているのは知っているのでレオンも団員

も何も言わないでくれている。

見えない何かがそこら中にあって全てを見えないふりをしていることで保たれている劇団。居心地は良く。フランも慣れるといいな、とレオンは本気で思っていた。

「深く関わり合わない方がいい」

フランから少し離れてフランの着替えを探している耳元でテッドがそう言った。

レオンは衣装を乱雑に保管してある衣装箱から顔をあげてフランがいる部屋の中央を振り返るとフランがニコツと微笑み返してくれた。

「…何で？エレンの人だから？」

「それもあるが…」

「何だよ。何か言いたいことがあるなら言ってくれよ」

レオンは顔を衣装箱に向きなおしながらテッドと会話をする。テッドは帽子で口元を隠して話を続ける。

「あの子をさらうのが仕事だって言っていただろう」

「依頼書は読んだ。仕事も成功しただろう？」

「成功はまだしていないが…まあいい。だったら次の航路は知っているな」

「次は…ええつとマリスフィームだっけ？水の神殿があるとか」

「そう。ノアール領の水の都市。その意味がわかるか？」

「さあ？」

「彼女はエレン領のお姫様であり、マリスフイームには未だにエレン領との確執を嘆く人間も多く残っている土地だ」

「知っているよ。でもこれは狂言誘拐なんだろう？ だったら途中で誰かが回収しに来てかくまってくれるんじゃないの？」

「立ちよる予定は無い」

「じゃあ…ノアールには来れないよな」

真つ赤なドレスを持ち上げて固まるレオンが半身を振り返るとフランは驚いたような顔をして首を横に何度も振った。

派手すぎるよな、とわざと大きな声を出してドレスを衣装箱の奥へ投げて服を探し始めた。

「依頼書には誘拐する、しか書いていなかった。だったらあの子はどうするつもりだったんだ？」

「塔の中にずっといたからな…欲しいものは全て揃えてくれた人がいた。現実を知らないのさ」

「依頼書を執事に渡すくらいだからなっ俺らのことどうやって知っただらうな？」

「何度も公演しているからな」

「じゃなくて裏の家業なんて普通知らねえだろう？ 誰かから聞くにしても誰に聞くんだ？」

「執事じゃないか？ そんな話をしているんじゃないんだ。話をすりかえるな」

「はいはい。とにかく忠告は聞いておくよ。俺だって子供じゃないんだから大丈夫」

「そう…だといいいんだが」

テッドは帽子を取ってニコツとほほ笑んで部屋を出る。

一人にされたレオンを見兼ねたミレイが一枚のワンピースを差し

だしてくる。レオンは顔をあげてそれを引っ掴む。

「あんな姿で居られたら気になって仕方ないわ」

「ありがとう。それで着替えも手伝ってくれると助かる」

「優しいのね。あの子には」

「俺は誰にだって優しいぜ」

「あっそ」

レオンの手からワンピースを取り返してズカズカとフランへ近づいていくミレイに怯えるフラン。背中越しに大丈夫だよ、と口パクで言うと同じように口をパクパクさせるものだから変な顔でミレイがフランの手を引いて着替え部屋へ引っ込んでいく。

外からの搬入も多く人通りがある部屋なので騒がしい。大工が舞台をばらす音や音響がスピーカーやモニターを回収している姿にホッと息をつく。

街から街へと移動する船なので舞台関係の荷物はここへまとめられて相変わらずごちゃごちゃしている部屋。大部屋なのに荷物のせいで小さく思える。

甲冑を外して衣装箱へ投げ入れてレオンの着替えは終了。女の着替えてるのは長すぎるな、と待ち疲れて着替えている個室を覗きに行こうとした時、ちょうど扉が開いた。

「あの…これ」

「いいんじゃないの?」

「でも…かなり薄くてスースーします」

「まああんなゴテゴテしたもん来てたら変な感じだろうな。ミレイありがとうよ」

小さく手をあげてミレイは去っていく。口も態度も悪いが面倒見が良くって思いやりもある。

「よし。これで移動するまでに船の中を案内してやるよ」
「はい」

ニコツと笑うフランを連れてレオンは楽屋を出た。

長く細いだけの通路にさえ新鮮な驚きを見せるフランに案内してやるのは悪い気分では無かった。

いくつかの部屋であった劇団員ともうまくあいさつ出来ている様子で案内は順調だった。

居住区を適当に案内して船室が並ぶ手前の部屋へ来るところで案内は終わるはずだったが、問題が起こった。

「ッ！！」

船全体が揺れるほどの衝撃にフランが倒れそうになる身体を支えるレオン。

揺れは断続的にあり、爆発音まで聞こえてくる。悲鳴や応戦する重火器の音まで耳に届いてくる。

「離陸するぞ！！しっかりつかまっておけ」

親方の船内アナウンスが怒号のように響く通路。

演技にはやりすぎじゃないのか、と思いつながらレオンはフランを部屋の中へと押し込もうとする。

だが、フランはレオンにしがみついて離れようとしなかった。

仕方ないな、と思いつながらも外の様子が気になっていた。フランに当てられたゲストルームには窓があり、外の様子もつかげえるはずだと言いついて二人で中へ入ろうと提案する運びとなった。

一緒に入ることと約束すると納得してくれてフランも中へと入る。狭い部屋。ベッドがあるだけの質素な部屋だが通常四人が押し込

まれる船員室と同じ規模の部屋だった。

「これは…」

部屋に入るなりレオンは激しい音が気になって窓へと近づいた。フランもレオンに手を引かれて窓際に来る。レオンの手をしっかりと握りながらレオンの肩越しから外の様子をうかがった時、光が破裂して悲鳴をもらしてしまった。

「あ…ッ。何が起こって…いるんですか？」

フランは中腰になったレオンの身体へしがみ付いて顔をうずめた。窓の外にある光景をそのまま言えば大変なことになると思ったレオンは少し考えてからこう言った。

「花火だよ。演目には花火があがるだろう？」

「はい」

「その中へ突っ込んだ」

「でも演目は終わりましたよ？主役はレオンでしょう？」

思ったよりも冷静なツツコミにレオンはとぼけるように笑ってこまかす方法を考えた。

レオンにしがみついている間に城壁の上へ並ぶ大砲は見えない。重火器の音や兵士の怒号や城下町にいる人々の頭上を越えた位置まで来るまで無言でフランの頭を撫でて危ないからジツとしている、と言っていた。

子供のようにつん、とつなずいて言いつけを聞くフラン。

「演目は終わったケド帰る時にまた来てくれってという花火をあげるんだ」

「前はそんなの無かった」

「今年から始まったんだ。前に来た時は静か過ぎて祭りっぽく無かったからな」

「…本当？」

「ああ。本当だぜ。花火は今年からだから間違えてシーアテイルにかすったんだろうな」

我ながら無茶苦茶な言い訳だと思う。自覚はあるがそれ以上に思いつく言葉が頭に浮かんでこない。

フランの震えは止まり、動きも止まった。ゆっくりとレオンにうずめた顔を離すと真っ赤な鼻が見えて幼い顔がもっと幼く見えた。

「私のせいじゃありませんか？」

「いいや全然。誰のせいでもない。強いて言うなら親方が空路をもつと海側にすれば良かったかな？ってくらいかな」

「…良かった」

「そんな暗い顔するなよッ」

「ごめんなさい」

「謝るなつてば」

「ごめ…なさい…」

しおらしくなるフランにため息を吐くレオン。

「本当に…ごめんな…」

「どうした？」

「レオン…あれ…私…何だか…」

「おいッ！！フラン！！」

「フラニー…」

「そんなことはどうでもいい！！しっかりしろ！！どうしたんだ？」

「！」

「呼んでもらえませんか？」

「フラニー。これでいいのか？」

「ええ……」

突然倒れたフランを抱きかかえるレオン。浅い息に熱っぽく真っ赤になる顔。髪もびっしりと濡らすほどに流れる汗。

レオンがあだ名を呼ぶと満足した笑みを浮かべて薄く開いていた瞳を閉じてやがて腕の中で眠るようにレオンへ身を預けたのであった。

「すぐにスウィニーを呼んでくる」

フランをベッドへ寝かせた耳元でそう言って部屋を出たレオンだった。

フランの身体

部屋を出たすぐにミレイが立っていた。手には銃が持つてあり、つをレオンへ投げ渡した。

「白兵戦になるのか？」

「護身用に一応ね。あなたの大切なお姫様を守りたいでしょう？」

「もう劇は終わったぜ」

「あら？怒ると思った時には無反応で鈍感なのね」

「なんで？」

「…いいわ。それでどうするつもりなの？」

「いきなり倒れたからスウィニーを呼んでこようかと思っている」

「戦闘中なのに？よっぽど大切なのね」

「依頼が一番だって親方に教えてもらっただろう？何かあるうと依頼は達成するようにつて」

レオンは銃の装填数を確認して腰にかけたホルダーへ銃を押しこもうとした銃をミレイが奪い取ってレオンへ向けてハンマーを親指で押した。

「何をするんだよッ！！あぶねえぞ」

「小道具よ」

引き金を引くとカチツと空のシリンダーが回る音がした。装填されているように見える小道具。これを客に見せて音に合わせてアクションをするとより臨場感が得られる。

「外のも演出なんでしょう？現に近くを打っているのに一発も当たってないし」

「そう…そうだと思うぜ」

「レオンも落ち着きなさい。たぶんあの子のが移ったのよ」

「ああ悪い」

「そういうこと。私は寝るからその小道具も返しておいてね」

「それだけの為に持ってきたのかッ?!」

「いいえ。あんたみたいにパニックになった子から没収したばかりなの」

それじゃあね、とミレイは銃をレオンへ押しつけて通路を歩いていった。

レオンはその銃の引き金を自分で引いてみて小道具だと確認する。何度も使ったことのある小道具。軽くて装飾も派手すぎる。

どうしてこんなの間違えたのか。フランの焦りが伝染したのか。

「早く行きなさいよ。待っている人がいるんでしょ」

ミレイは二つ隣の船室へ入ろうとしてぼんやりと立っているレオンの背中へそう言った。

振り返ると閉まりかけた扉が見えてミレイの姿は無かった。

「そうだ。スウィニーのところへ行かないと」

スウィニーの医務室は一つ上の階にあり、シアテイルのエンジンルームとプレイールームラウンジの間にひっそりとあった。

そう広くない船内。レオンの足では二分もかからないで来られるが船が揺れているせいでもっと長くかかった気がする。

半分開いてある扉を内側へ押しして中を覗くとスウィニーが振り返った。

犬人族であるスウィニーは耳が長く垂れてあり、毛色は白と黒が混じっていた。

「何があつたの？白兵戦？」

「いや？」

首を傾げるスウィニーと同じように首を傾げるレオン。

うつん、と悩みながら一つの薬を取り出してレオンへ投げてよこした。

「魔法かけられているよ」

「魔法…？」

「そう。飲んで。ほらッ」

促がされるままにレオンは投げてよこされた小さな瓶に入っている液体薬をグビツと飲みほした。

すう、と頭にあつた熱が引いていくような感覚があり目が覚めた気分になった。レオンは薬を見てまた首を傾げた。

「魔法なんてかけられた記憶なんかあつたっけな？」

「イタズラなのかな？弱い魔法だけど混乱する魔法。誘惑も混じっている複合魔法。エルフが遊びで使う魔法だと思っ」

「エルフ？だったらエルフが近くにいたのかな？偶然通りがかって魔法をかける」

「目つきが悪いから怖かつたのかもね。エルフは気まぐれだからね」
「なるほど」

レオンは空き瓶を適当な机の上へ置いてうなずいた。

スウィニーも手をあげてもういいよね、と言つように振り返りデスクワークへと戻ろうとしたのを呼びとめる。

「そうじゃなくてフランが大変なんだよ。熱っぽくてちょっと見て

もらいたいんだ」

「フラン？」

「あの例のお姫様さ」

「あーそういえば外の騒動はそういうことだったね」

スウィニーは手元に並ぶ薬を適当に革製のカバンへ入れてやれやれ、というように立ち上がる。

見た目では分かりにくいが年齢の男だと自らは言っている。嘘か本当かわからないような昔話をずっと語るせいで医務室はいつも閑散としていた。

眠り心地がよさそうなベッドが二つ並んでいる。船室のやつよりも充分に広さがある。

レオンはゲストルームにスウィニーを案内する。船内の揺れはズいぶんとマシになっている。

ペタペタと素足で歩くスウィニーの足取りは遅くレオンは角を曲がる度に振り返りスウィニーを待っていた。

ようやく辿りついたゲストルーム。行きとは違う意味で長く感じた。

「さてさて」

スウィニーはベッドの脇に座って横たわるフランをジッと眺めて低い声でうなづいた。

その背後に立つレオンは退屈そうにそのスウィニーの後頭部を眺めていた。窓の外も落ち着いて巡航モードへ切り替わるアナウンスも流れたこともあり警戒態勢は終わったようだった。

通路にはそろそろと戦闘待機していた船員の足音が聞こえている。

「塔に閉じ込められていたって言うていたよね？」

「そう」

「そこには何があった？変わったことはある？」

「変わったことね…何と比べてだい？」

「比べる必要はない。たとえば外壁に札が貼ってあったとか」

「札か…」

時計台に登った時には室内の明かりでフランの部屋は見えだが外壁の細部までは見えていなかった。

外壁はレンガを積み上げられた昔ながらの塔だった。円柱の建物で部屋の部分だけが他の部分より一回り大きく時計台側に大窓があった。おそらく円柱に螺旋階段があつて地上へ続いているだろう。

細部まで思い出そうとするとどうしても中の部屋ばかりが思い出される。部屋の明かりで奥の壁に本棚やベッドや人形の影が映っているのが見えていた。

「人形…そうだ。魔法人形がいたな」

「魔法人形ってのは魔力を吹き込んで動かすタイプのやつかい？」

「ああ。フランは勝手に動きだしたって言うていたな」

確か名前はシルクくんだった。

時計台に飛び降りたフランに手を振る無表情がなぜか強く印象として残っている。

「…だとすればこの憔悴した状況にも説明がつく」

「どういうことだい？スウィニー」

「彼女は魔法を自然に発してしまう体質なのさ。まれにそういう人がいるって聞く」

「それは病気なのか？」

「それは何とも言えないね。赤ん坊に多いんだ。年齢と共に自然に解決される」

「でもどう見ても赤ん坊には見えないぜ？」

「普通は赤ん坊から大人になる過程で魔法を制御する方法を周りの大人から学ぶんだけど彼女はずっと一人で制御する方法を知らなかったのかもね」

手元に置いた革製のカバンから一枚の木製の札を取り出してフランの小さく膨らむ胸の上へと置いた。札には見慣れない文字が並んでいた。

「時々、執事が入って来ていたと言っていたのも関係あるか？」

「わからない。でも本か何かで知識を得て成長と共に魔力を培ってきたのが外へ出た興奮とストレスで制御出来なくなっただけというものも考えられる」

「それは…治るのか？」

「安静にしていれば問題ない。この札は微力に魔力を吸い取ってくれるからそれで大半を発し終えたら落ち着いてくると思うよ」

「俺は近くにいっても大丈夫なのか？」

「ああ。何かあれば呼んでもらえるかい？この札の効力は次の目的地へ着くまでは充分持つから何も無いとは思う」

「ありがとう。だったら俺はずっとここで見ておくことにするよ」

「…レオン」

「ん？何だい？」

スウィニーはカバンを持って立ち上がり、こんなことは言いたくないかと前置きをした。

「あまり深く関わらない方がいい。彼女はお姫様で君はエレンでは良く思われていない」

「スウィニーまでテッドみたいなのを言うんだなッ」

「そりゃそうだよ。僕だって可哀そうだと思ったりするけど君とこのお姫様が仲良くなるほど辛い別れが待っているんだよ」

「みんな重く考えすぎなんだよ。俺はただ…」

「レビーに似ているんだろ？そっくりだ。若い頃を見たこともある奴なら誰でも目を疑いたくなる」

「…」

レビーとは幼い兄弟の母親で白い輪が目に出てきたことを恐れて教会へ兄弟を捨てた有名な踊り子だった。

まだ二歳だった弟の瞳には白い輪が無かったが兄と同じ血が流れているから怖いのだ、と言って雨降る街へ消えていった後姿を憶えている。

「まあ…昔は昔。今は今。そんなに思っているほど俺は子供じゃないぜ」

「それならいい。でも」
「はいはい。話は短く要点をまとめないと医務室のベッドが埃っぽくなるぜ」

話を続けようとするスウィニーの背中を押して通路へ押し出したレオンは振り返る隙も与えずに扉を閉めた。

「あの…」

「何だ？起きていたのか？」

「いいえ、さっき目が覚めました。このお札を置いてから気分が良くなりました」

「そりゃスウィニーを呼んだかいがあつたってもんだなッ」

へへへ、とイタズラな笑みを浮かべて枕元にちょこんと座るレオン。札を手に持ちながら起き上がるうとするフランの肩を軽く押し、寝ていると言った。

抵抗することもなく寝そべるフランは落ち着かない様子で窓の外を眺めるレオンへ視線をやった。

外は真っ暗で星も見えない。竜や大型の鳥がいれば閃光弾を打って追い払うから綺麗なんだぜという説明をしていた時、視線に気づいて立ち上がる。

「邪魔か？ ゆっくり眠りたいなら出て行くぜ」

「ううん… 何だか嬉しいの」

「嬉しい？」

「ずっと一人でいるからこうして誰かの話を聞いていることが嬉しい」

「そうか？ まあ普通だぜ。いつか慣れるさ」

レオンは座る場所を探すように室内を見渡して話を続けた。本棚やサイドテーブルはあるがどれも座る場所とは言えない。

ゲストルームは本来一人で泊るように作られていることもありそれなりにモノは揃っているな、と自分の狭い船員室と見比べてしみじみと思っていた。

本棚の脇には扉がありシャワールームや専用のお手洗いも完備されていることに感心しているとクスクスとフランが笑った。

「そんなに面白いか？」

「はい。とっても」

「ううん… 良く分からないが悪い気分じゃないぜ」

「レオンさんは不思議な方ですね」

「ここにいるやつは全員特別って言われているよ」

レオンがあまりにもめんどくさそうに話すのでフランも布団の中へ引っ込んでしまった。

それでも黙って待っているとひょっこりと顔を出してレオンを覗いてくる。

ため息を吐いてレオンはフランが眠るベッドの脇のフロアリングへ座って布団を剥がして顔を覗いた。

「もう平気みたいだな。札はずっと持っているよ。目的地まではまだまだ時間がかかりそうだからな」

「目的地？この船は何処へ向かうのですか？」

「マリスフイーム。水の神殿があつて貿易が盛んな街だ」

「知っています。川がたくさん街中に流れていてレンガの橋の下をカーテルっていう扇形の船で移動しているんですよ？」

「そうだ。補足すると扇形つてのは一人用で主に商人が商品を運ぶ時に使う。観光には楕円形のカーテルが一般的だ」

「面白そうですね。ぜひ乗ってみたい」

「ああ街へ降りたら時間があるし乗せてやるよ。でも結構揺れるぜ？」

「大丈夫です。さつきも揺れましたし」

「ハハハ。あれよりは揺れないのは約束するよ」

フランは知識で得たマリスフイームをレオンは実体験したマリスフイームの話をした。

二人の話は尽きることがなく、最後には必ずその目で確かめに行こうなと言って約束を増やしていった。

脳裏にはスウィニーやテッドの言葉が過つたが見ないふりで話を続けた。

「貿易が盛んだと人がたくさん集まる。毎日がお祭りみたいなもんだ」

「あのような賑わいが毎日？楽しそう」

「楽しいぜ。そこへも案内してやるよ」

「ありがとうございます。楽しみにしています」

「ハハハ。でも離れるなよ。人が集まる場所には喧嘩がある。特に海賊がいれば厄介だ」

「海賊…？」

「海賊を知らないのか？」

「はい」

「海賊ってのは…」

あんまり怖がらせるのもどうなんだろうな、と思っ言葉に詰まるレオンは頬を掻いて悩んだ。

「すごいめんどくさい」

自分で言っバカかっと思っレオンはため息を吐いて忘れてくれ、と言った。

「とにかく街にいる時は俺から離れるな。そうしていれば俺が何とかしてやるよ」

「はい。勇者様ですものね」

「それは…だから劇の衣装だっば」

聞く耳も持たないフランは演劇好きなのが伝わってくる。本だけが全てで外に見えるものと言え一年に数回の演劇と兵士の訓練だけだろう。

それだけに演劇は輝いて見えるに違いない。華やかな世界は人を惹きつける。観客の瞳の輝きを見れば誰もが夢を見る乙女になるとテッドが言っ言葉をふいに思っだした。

キザな言葉。甘ったるい声でささやくと頬を染める客を幾度とな

く見てきた。

「竜が近づいてきているぞ」

管を通ってアナウンスが船内に流れる。

レオンは窓の外を見て確認するが竜はシーアテイルを仲間だと思
って寄り添おうとしていた。

「今から光るぜ。眩しいから目を細めてみるよ」

フランは上半身だけを起こして窓の外をレオンの視線を追って竜
を探した。

夜の空は真つ暗で月も無い。それでも必死にレオンの目線を追っ
た。

「閃光弾射出!!」

アナウンスがそう言うのと少し遅れて閃光弾がよれよれと竜へ向か
って降りていく閃光弾の尾から漏れる煙が見える。

やがてまたたく間に光が暗闇と竜を追い払った。美しい楕円形の
光にレオンも目を細める。上下に長く伸びる十字架となって最後は
闇に消えた。

竜は驚いて彼方へと消えて行った。

「綺麗…」

ぼつりとつぶやいたフランの言葉。目を細めている横顔に綺麗だ
ろう、と言った言葉も聞こえていない様子で恍惚とした表情を浮か
べていた。

光が消えた後も余韻に浸っていたフランをレオンは見つめる。い

つか兄弟を捨てた母親の記憶はかすかにしか無いが似ているのはわかる。だから、ではないと自分に言い聞かしながらもう少しだけその横顔を見ていたいとレオンは思った。

マリスフイーム

フランは話疲れたようでありつの間にか疲れて眠ってしまった。レオンは彼女を残して部屋を出てすぐに親方がいるはずのブリッジへ向かうことにした。

これからどうするのかを訊ねるつもりだったがうまく話を切りだす言葉が思い浮かばない。頭を悩ませて何て聞くのかを考えていたが結局何も浮かばないままでブリッジに辿りついた。

扉をノックすると中からは入れ、というしゃがれた声が返ってくる。

「レオンかッあの子はどうしている？」

「すっかり眠っているよ。まあスウィニーが言うとは色々あって疲れが溜まっているそうだ」

曖昧な説明をするレオンは親方が座る座席へと続く階段を登りながらそう答えた。

操舵するレバーやレーダーモニターやアナウンスのマイクがずらりと壁際に並んであり親方の席はそれらと前方一面に広がるガラスと全てのモニターが見れる位置に陣取ってある。

ブリッジの後方を占拠するほどの大きな椅子は親方でさえ小さく見える。通常運航になるとそのまま横になって眠れるようにと作ったという話を聞いた。

親方は右肘をサイドテーブルに乗つけて頬杖をついてゆっくりと歩いてくるレオンを目で追っていた。

やがて一段低い位置で立ち止まると左のサイドテーブルに乗ってあったブランデーを瓶ごとひっくり返し大きな口に流し込む。

「被弾はどうだったんだい？」

「最小限かすっただけで巡航には問題ない。そんな心配をしに来たわけではあるまい」

「まあな…フランのことをちょっと話に」

親方は空になった瓶を足元に置くと世話役のゴーがさっさと瓶を回収して椅子の裏側に隠れている部屋に引っ込んだ。

あの部屋は世話役ゴーの部屋というより倉庫と言った方がいい。

ゴーは常に頭まですっぽりとボコをはおっているネズミ族の女。

長く突き出た鼻だけが見えて表情は隠し続けている。親方以外とは一切話さえもしないので謎が深い人物だった。

「お前が心配するようなことはない」

「まあそれならいいんだぜ。ただ街へ行った後にフランはどうなるのかな？って思ったりしてさ」

「依頼書には何も書いていない」

「そう。塔から連れだした後が何も書かれていないから…ほら仕事は最後まで責任持っていつでも言っているだろう？」

そうだ、と深くうなずいてちつとはそれらしい顔になってきやがって、と言った後にサイドテーブルにあるはずの瓶を探して宙を掴もうとする親方。

完全に酔っぱらっているな。大丈夫なのか、とレオンは思いながらも親方の機嫌を損ねないように話を続ける。親方は面倒になると会話もロクにしようとしなくなる。特に酒が入っている時はそうだった。

椅子の裏側の部屋からゴーが出てサイドテーブルに新しい酒瓶を置くと親方はグイツと持ち上げて一口で半分も飲んだ。

「あの子のことは問題ない。街へ着けば向こうの国の人間に手渡すこととなっている」

「本当なのか…」

「何だ残念そうだなッ。惚れたか？グヒヒヒッ」

「あんた飲み過ぎなんだよ。俺はただ…」

「ただ気になるだけか？だからお前にあの子を任せただ」

「どういう意味だ？」

「恋くらいさせてやろうと思ってなッ。こりゃレオンの方がするとはなッガハハハ」

「違うぜ！！何を勘違い…してるんだ。酒を飲み過ぎだぜ少しは身体を気遣えってんだ」

「うっん…そうだ…そうすることにしよう。俺はちよつと寝るぞ」

酒瓶を逆さにして全てを飲みほしてから空になった瓶を足元へ置いて後ろへ倒れるように寝ころんだ数秒後には寝息を立ててやがる。

ゴーは慣れた様子で瓶を片付けて器用に両手で足を持ち上げて椅子の上に寝かせていた。

ブリッジの人間もいつもの光景だと言わないばかりに持ち場の仕事に集中している。途端に居心地が悪くなったレオンは頭を撫でながらため息を吐いて階段を降りる。

平らなフロアへ降りた時には寝息はいびきに変わり、とつとと退散するのがいいって思えるような爆音がブリッジ中に響いた。

扉を開き通路へ出たレオンは親方の話を思い出しながら歩いていった。

「何だ…もう心配ないんだな」

小さな声でもらすとさらに胸の中にある感情が窮屈だっってギユウギユウと音を立ててくる。

フランには執事がいて国があつてシルクくんだっているしな、と言葉を吐く度に感情が抜けおちていく脱力感とすっぱりと抜けた虚脱感が同時に襲ってくる。

何を考えているんだかな、と自分自身を自嘲して歩く。

足取りが重くて数秒後には立ち止まってしまった。このままフロアの部屋へ帰る気にもなれずにふらふらと人の気配を避けていたらいつの間にか甲板へ出た。

夜の風が気持ちよくてしばらくポーッと突っ立っていた。

「もう会うことも…でもまた公演をする時に会いに行けばいいか。うん。そんなときも勇者の衣装で」

「何を独り言しているの？芝居の練習なら付き合っケド」

「ミレイ…か？どうしてこんなところにいるんだ？」

「いたら悪いかしら？」

「そうじゃないけど」

甲板の柱の裏からミレイが出てきてレオンに話しかけてくる。とつさに現れるもんだからビックリしたぜ、と言ったが冷やかな視線に黙ってしまった。

「テッドの言う通りね」

「何が？」

「あんたは子供で別れる辛さを知らないってこと。私達みたいな流れ屋稼業をしているとこれからも別れることばかりよ」

「俺だつて知っているさ。ただ…」

「ただ？言い訳ばかりね。そんなんだから子供だつて言われるのよ」

「誰に？」

「…はあ…言つてて悲しくならない？」

ミレイは本当に情けないと嘆いて手に持っていた水を一口飲む。

「彼女は特別だつてテッドだつてわかっているわよ。母親に似ているんでしょ？」

「ああ…スウィニーも言っていた」

「だから気になるだけよ。ただ懐かしがっているだけなの」

「そんな言い方しなくてもいいだろう？」

「それよツ！それがダメだって言うの。いつものあんたならそうかもなって言って他の話をしようとする」

そう言われて何も言い返せなかったレオンも自覚はある。自分の胸にあったのは懐かしさなのか、と思うと楽になった気がする。

「テッドもああ見えてすごい繊細だから気にしているわ。あんたのこともあの子のことも」

「テッドが？母親に捨てられてうらんでいると思っていた」

「バカね。事情があることくらいテッドにもわかるわ。ただ納得するのに時間がかかったのよ」

「…」

「ああどうしてあんた達兄弟はダメダメなのかしらね。あきれて何も言えないわ」

ミレイは髪をくしゃくしゃと触ってオーバーアクションでそう言った。

「これで少しは大人になりなさいよ。それと小道具を戻すことを忘れないでね」

石像のように固まったレオンを通り過ぎて船内へ戻るミレイはすれ違い様にそう言った。

ようやく振り返った時には後ろ姿も見えなかった。残されたレオンは小道具の銃を取り出して返しに行かないとな、と呟いて船内へ戻った。

マリスフイーム

水の街と呼ばれるにふさわしく街中には路地よりも多くの水路が流れていた。

名物は二つある。一つはカーテルの上に商売品を積んでカーテルで観光する客相手に商売している光景。もう一つは

「この格好は？」

「名物だよ。同じ格好をしている奴が多くいるだろう？」

精霊術式が縁に書かれた巡礼服を頭まで被らされたフランは膝丈のスパッツを履いて動きやすい革の鎧を着たレオンに訊ねる。

街を見渡すと神殿へと向かう巡礼者が多くいて女性はほとんどがこの服、カムイと呼ばれている服を着ていた。

名物のもう一つは宗教。水の神として精霊セイラムを崇める宗教が盛んな街。一日に一回は巡礼として神殿へ祈りを捧げる列が見られる。

「それはわかりますがどうしてこの服を私に？」

「普通の服を着ている方が目立つだろう？ミレイだってこの街にいる間はその服を着ているぜ」

「本当ですね。ミレイさんは何を着ても似合います」

目をキラキラとさせて少し前を歩くミレイを見る。細身の身体にはサイズが合わないカムイしか無くて不満をもらっていたのは黙っておこう。

「フランだって似合うぜ」

「はい。サイズもピッタリです」

「それは子供用だけどなッ」

「え…？」

「ハハハやっぱり似合っているぜ」

「もうッ！辞めてくださいよ」

「悪かったって脱ぐなよ」

脱ごうと手をかけたフランの腕を掴んで謝るレオン。少しだけ振り返るテッドは何も言わずにまた歩き始める。

わかっているよ、と心の中で答えるレオン。まだ時間はある。せめて日が落ちるまでは楽しくいさせてくれよ、と続けてテッドの背中へ言った。

「悪いな。もう機嫌治してくれよ。ほら…仕事が終わったら観光しようぜ。何でもおごってやるよ」

「何でも…ですか？」

「おう。好きな場所へ連れていってやる。名物の水饅頭なんか柔らかいかな、たえに甘いタレがかかってそれを食べながら街を歩こうぜ」
「そう言うのなら許してあげますよ」

フランはようやくニッコリとほほ笑んだ。急に上機嫌になり鼻歌交じりに何を食べようかなと内側のポケットから取り出した街案内のパンフレットを広げた。

一行が向かうのはギルド【メロウスリープ】。倉庫街の手前であり、そこでフランを引き渡す手筈を整えると言っていた。

すれ違う人は先頭を歩く親方を見るなり怯えたり道を開けたり様々だったが女性に関してはその隣にいるテッドへばかり視線を送っていた。

カムイを着せなくとも目立たなかったのかもしれないな、とレオンは思いながら退屈そうに街を歩いた。ギルドへ入っても話は親方とテッドとミレイが行う。

いつもレオンはロビーで待たされて指名手配写真やすぐに解決出来る小銭稼ぎの仕事がないかをチェックするだけだった。

「これとこれとここへ行つて」

「そこは退屈だぜ？何も無い」

「何を言っているんですかッ？！アスカラミューズの舞台となった神殿ですよ。円柱がたくさんあつてその一つ一つには神様が彫つてあるとか」

「神様だつたんだ。立ち入りも可能な場所だから見れるぜ。ただちよつと思つたより小さいケドな」

「小さい？」

「親方と同じくらいかな？」

「充分大きいと思いますよ。約束ですね。絶対に連れていってくださいな」

「わかつた。あんなので良ければいくらでも見せてやるよ」

レオンが約束するとフランはやった、と子供のように喜び次に見るモノを探していた。演劇の舞台になった建物や場所をめぐる旅になりそうだな、と今まで行った演劇を思い出そうとして五秒後には辞めた。

とにかく日差しがキツイ。水路にいと涼しいくらいなのだが倉庫街には水路は無く風を遮断するように隙間なく建物が連なっていた。

倉庫街にもカムイを着た人間も商人も多くいるが、それ以上に屈強な男の数が増えている異様な光景だった。

リゾート地には似合わない物騒な装備を抱えて互いをけん制するようにならみ合っているが親方を見るなり視線を外そうとする姿も

見慣れたものだった。

巨人族は気性が荒く、好戦的で野蛮だと決めつける多くの伝説が間違った形で広がっている。

親方は特別に気にする風でもなくマイペースに歩みを続けている。その足がメロウスリープの前で止まった。

外観は街に溶け込める工夫がしてあり、綺麗な色のレンガが積み上げられて二階のテラスにはカフェスペースも設置されている。これはマリスフイーム政府の要請があり景観を損ねる建物を全面禁止にしてあるからだ。

だが、入るのは屈強な男がほとんどだ。

「レオンツッ！合流は夕暮れ時後は自由行動させてやる」

「いいのか？」

「お前がいても退屈そうにしているだけだからなッ！！お姫様も連れていけ」

「そういうことなら夕暮れまで街を歩かせてもらっぜ。さあ行こうぜフラン」

親方は首を鳴らしながらメロウスリープの扉を開いた。

テッドやミレイもその背中へついて中へ入る時にレオンの顔をちらりと覗いてきたが心配ないぜと言うように微笑み返しておいた。

伝わっているのかどうなのかわからないままに二人は扉をくぐって中へと消えていく。

「あの…」

「いいんだよ。いつつもこうだ。俺は交渉や話しあってたのがとことん似合わないらしい」

やれやれと肩をすくめるレオンを見つめるフランの手を無理やり引いてさあ行こうと歩き始める。

親方がくれた最後の時間を一秒でも無駄にしたくないから少々かけ足になったかもしれない。はじめは戸惑っていたフランも次第に自分からレオンの手を引いてあれやこれを見たいとか食べたいとか言うようになっていた。

中でも気に入ったのはカーテルの弾力性ある乗り心地と水饅頭のタレだった。その二つを堪能しているカーテルの数メートル先に見えるレンガの短い橋があつて子供達が風船を片手にこちらへ手を振っている。

「振り返してやれよ」

「え？私が？」

「子供はそれが無性に嬉しかったりするんだぜ」

フランは橋をくぐり終えた後に振り返り手を振ると子供はすでに路地へと走り去っていく背中が見えていた。

ほんの少し寂しげに残るあげただけの手をゆっくりと自分の元へ戻して慰めるようにもう片方の手で握った。

「遅かったか。タイミングってのは難しいぜ」

「ええ」

「次はすぐに振り返せばいいんだ。水路はまだ充分ある」

「はい。次はきつと振ります」

「ハハハ。その調子だと怖くて逃げちまうかもなッ」

グツと拳を握り頑張ると言ったフランの顔が徐々に笑顔になった。カーテルは市街地の水路をゆつたりと一周して元に乗った場所に戻った。船着き場から手を伸ばしてゆらゆらと揺れ足場の悪いカーテルからフランを引き上げる。

細くて軽すぎる身体。ふいに見せる儂い笑顔が胸を痛める。この数時間すればまた塔に戻るのか、と考えると時間が止まればいいの

になつて本当に思った。

「次…はありませんでしたね」

「ああ…ああ。でも次はまたある。今日じゃなくともまたいつかくればいいんだから」

「その時は一緒にいてくださいますか？」

「もちろんさ。次は俺も手を振ろうかな？」

「いいですね。約束…ですよ」

「ああ」

二人をおろしたカーテルが次の観光客を乗せて水路へ流れていく。すぐ目の前に見える露店で水饅頭を買って頬張る姿が曲がり角で消えると二人は次の目的地、神殿へと向かった。

カーテルが停泊していたのは港の隅。広場へと続く道があつて時計台を中心に左手に伸びる長い橋が神殿へと続く橋だ、と説明していると背後から声をかけられた。

「おやおや…リアムの方ではございませんか？」

「ん？ああセイファアか」

「うふふ…お名前を覚えていただいて光荣です」

背の低くぶかぶかで装飾品だらけの海賊衣装を身にまとつた髪の毛長い男が【セイファア海賊団】の若頭。その背後には露出が高い服を着ている魔術師アリーデと巨人族のゴルザレムがいた。

手には衣装と同じく装飾品で飾つたキセルがあり、長くて杖のように見える。

ついでにリアムとは白い輪がある人間の呼称だ。古文書の一節にそう書かれていたことに由来する。

「お連れの方は例の人ですね」

「……」
「申し遅れました。私はセイファア。海賊の父を持っておりますが
私自身は貿易商人と自負しております。エレンとも取引がございます
ですのでぜひご鼻屑に」

「……」
「怖がらないでください。うふふふっ」

フランはレオンの背後へと一歩下がり腰辺りをギュツと握った。
セイファアからフランを隠すように前で出るレオン。

「フランって言うんだ。もう知っているだろうが色々あるんだよ。
察してくれよ」

「色々とは淫靡いんびな響きですね。うふふふ」

「まあ…そうかどうかは知らないがほら海賊は誰だって怖いだろう
？だから用事がないのなら去ってくれるか？今は案内をして楽しい
思い出ばかりを作りたいんだ」

「そうです。観光とはそういうもの。ではお話を少しだけ」

「何か用事なのか？」

「ええ。神殿へ行かれるように見えましたのでご忠告を一つ」

「ご忠告？」

「はい…うふふふ。ここ数日、神殿の地下へ降りる階段が開かれて
おり多くのハンターや傭兵や海賊が押し寄せております」

「だから気をつけてってことか？いつからそんなに親切になったん
だ。気味が悪いぜ」

「うふふふ私はいつだって親切です」

「そうかい。だったらありがたく聞いているよ。話は終わりだな？
それじゃあな」

「ええ。またお会いしましょうか」

レオンはそれ以上答えずにフランの手を引いて神殿へ続く長い橋

へと歩いて行った。セイファーは追いかけてくることもなくやけにあっさりと手を振って引き下がったのが気になった。

いつもならば長く内容のない話を難しい言葉で繰り返してくるものだが、と考えたがすぐに頭の外へ押しやった。

長い橋は真つ白なタイルで作られてあり、足元を支える細い二本の支柱が等間隔で並んでいる。

「気にするなよツ。セイファーはいつもあんな感じだからさ」

「はい。でも地下へ降りる階段って言っていましたたがそれは水の精霊が眠る本当の神殿への道が開かれたっていう話なんですか？」

「よく知っているなって舞台でもやっていたよな。そうだ。神殿の中へ入る学者や信者が雇った傭兵や海賊がうろろうろしているってだけの話」

「神殿の中に入るだけなのに…中には魔物がいるのですか？」

「魔物がいたとしても扉が開いたのは数十年ぶりだから食料がなくて死んでしまっているぜ」

「そうですか。それなら怖くありませんのに」

本当に怖いのは互いのことさ、と言いかけて辞めた。心配症なんだよ、とだけ言ってこの話を辞めようとした。

「私も行ってみたいです。何もなかったのでしたら舞台になった場所は全てこの目でみてみたいです」

「ああ…まあ…ううん…」

「レオンさん？どうかしました？」

「いいや。奥へ入ると親方との合流時間に間に合うか…長い道中の神殿だつて聞くからな」

「長い？」

「ああこの橋よりも長い洞窟がある。だから入口の扉までだったらダメか？」

「…」

かたくなに口を閉ざすことで抗議しているわがままな一面は心を許し始めたってことか？とレオンはため息を吐いてそう胸中で思う。もちろん長い洞窟なんてものはない。だが神殿へ入るのは危険すぎる。セイファーが知っていたということは誰かがフランをさらおうとすることも考えられる。

杞憂なら見れなかったで済むがさらわれたら何をされるかわからない。そもそも何もなければ誰も護衛を雇うことはない。

そんな真実を言うより綺麗な思い出を残してやりたいと願うほどに嘘は増えていく。

「大きいですね」

神殿の前で入口を見上げるフランがようやく口を開いた。さきほどまでの不機嫌が嘘のように笑顔を見せている。

「水没している本当の入口はもっと大きいんだぜ。これは二階で披露目の時に使われていた場所なんだ」

「すごいッ。すごいです。レオンさん」

「ハハハ。喜んでもらえて嬉しいよ。中はもっとすごいぜ」

すっかり元気を取り戻したフランは橋を歩くのに疲れていただけなのかもって思える。横に広く小さな段差が七つある階段を走って登るフランの背中を追いかけるレオンもつられて笑った。

入口には二本の大きな柱があり、圧倒的な存在感の半裸の髭を蓄えた男が柱の中間を支えている。これもオルトの剣ついでいう劇で負傷した主人公がもたれかかるシーンで有名だった。

フランは男の彫刻のふとももを手で触れてその場で座り込む。ちよつとオルトと同じ格好で背中を預けたところで階段を登り終えた

レオンが目の前に立った。

「満足かな？」

「はい」

レオンは手を伸ばしてフランを立たせた。

背後には吹き抜けの礼拝堂があつて12の半裸の男の彫刻がある柱が壁際に内向きで並んでいた。

変わったものと言えば銅像の代わりに一段高い段差の上に壺が置いてあり、天窓から差し込む光がちょうど当てられていることだった。

神の水、と呼ばれてコインを投げ込むと幸運が訪れるという壺。フランへコインを一つあげて壺へ投げさせる。壺の五分の一がコインで埋まって足元には水がこぼれたシミが出来ている。

定期的を集めて神殿の補修に使われていることを知れば誰だつてありがたみが無くなるので黙って両手を合わせていることにしよう。

「何か願いごとを言えば叶うかもしれないぜ」

「…願いごとは誰にも言っちゃいけないですよ」

「幸運つてのは恥ずかしがり屋なのかな？」

「ふふっどうなんでしょうね」

フランはそう言つてまた願いに戻つた。レオンは願い事か、と考える。

ふいに過つたのはもう少しだけ一緒にいたいってこと。親方は二度と戻らないと言つたが気が変わることも祈つておこうか。そうでない则会えないもんな。

待てよ、それよりも塔から出られるように体質の改善を願つた方がいいのか？

…まあいいか。とりあえずまた会えるようになって祈つておこうと

思った時、ゴゴゴゴゴゴ、と地鳴りが足元から迫ってくる。

「何だッ?!」

レオンは目を開いて周囲を見渡すが特に変わった様子もなく気のせいか、と思った。
だが

「大変ですッ!! みなさん、落ち着いて外へ出てもらえますかッ!!」

神殿の奥に見える階段から一人のカムイを身にまとった女がそう叫びながら走ってくる。その背後の闇から地鳴りの正体が見えた。

人だ。人の足音がこの音だった。

海賊やハンターや学者や信者。様々な装いから開かれた扉から逃げてきているのだと確信する。

「俺達も逃げるぜ」

レオンはフランの手をとって走ろうとした時、人ではない大きな存在が闇を引き千切り姿を現した。

神殿

全身を青色の炎で包んだウォーラムという鹿に似た召喚獣。水の精霊の使いと呼ばれその存在も幻とされている。

ウォーラムは辺りを見渡して何かを探している様子でゆったりとした足取りで歩いてくる。中央にあった壺を蹴飛ばして割れる音が響いたが誰も聞いていなかった。

それ以上に男達の悲鳴がうるさい。レオンはフランの手を引こうとしたが、鉛みたいに重くて動かない。

「おい…フラン？」

ウォーラムと似た青色の炎が全身を包んであり、その瞳は虚ろなものだった。

共鳴と呼ばれる現象。精霊同士が何かを伝えあう時に起こるテレパシーのようなものだと言われているがどうしてフランが？ウォーラムもどうしてここへ？幻獣扱いされて使役するのも難しいはずだが。

疑問は次々と浮かんだがその答えを求める時間は無い。レオンはフランを抱きかかえようとすがビクともしない。

「何だつてんだッ！！」

「よ…よんでいるの？私を呼んで…何？聞こえない」

「おいッ！！フランッ！！」

魔法を発する体質がウォーラムを無意識に召喚した？そんなことも思ってはありえないと否定した。

だがフランが何らかの魔法を使っている、あるいは使用者とコンタクトをかわしているのは間違いない。嫌な予感は当たった、と辺

りを見渡す。術者を探したが人が多すぎてわからない。

「待ってッ！！まだ何もッ」

フランはウォーラムへ向かって手を伸ばしたがその姿を保てなくなったウォーラムはわずかな炎だけを宙に残して消えてしまった。同時にフランを包む炎も消えた。騒ぎが終息していく神殿内。まばらに足音も止み始めてついに誰もが立ち止まり狐につままれたような顔をして互いに顔を見合わせる。

夢なのか、イタズラか、という言葉が飛び交う中でフランは手をおろした。

「行かなきゃ…」

「何だつて？フラン？」

小さな声で何かをつぶやくフランが下ろした手の甲を擦り不安げな顔で奥の暗闇を見つめた。

レオンは視線を遮るように立ってフランの顔を覗きこむが虚ろな瞳でレオンさえ映っていない。

「呼んでいる…私を呼ぶ声が聞こえた…」

「おいッ！！フラン？」

「レオンさん、行かないとダメなの」

「行かないとダメって言われてもな。何処へ誰に会いに行くんだ？下の神殿に誰かがいるっていうのか？」

「ううん…それはわかりません」

レオンは首を振るフランに頭を悩ませる。その虚ろな瞳を見ていとダメだ、とは言えなくなる。

呼んでいるとなればウォーラムを召喚した人間もいるということ。

それは危険なことなのだろうか。短い間で思考を巡らせるがその全てはフランの丸く大きな瞳に吸い込まれていった。

「私は一人でも行きます。レオンさんはここで待っていてください」「どうしたんだ？ いったん落ち着いて考えてみようぜ」

「冷静です。理由は説明出来ません。それでも何か私を待っている」

「ううん…困ったもんだな」

レオンは説得する言葉を探したが見つからなかったのは自分もあれが何なのかが気になっていいることにあると思った。

止めるべきなのに自身も行きたいと思っっているという矛盾が胸にあって困っているレオンは自分が守れば大丈夫かと諦め口調で護衛としての責任を持つ自分の心を慰めて奥の部屋へ振り返る。

騒ぎがおさまってぞろぞろとまた人が中へ入っていく姿があった。人の列が消えるまで背中を見送ってフランへと向き直る。

「一つだけ約束できるか？」

「…？」

「俺から離れないこと。それが出来れば奥へ行くくらいなことないさ。ついて行くぜ」

「はい。お願いします」

フランがようやく表情を見せたのは笑顔でなく不安に満ちた、まるで怪我をした動物を心配しているみたいな悲しみがある表情だった。

何も気付かないふりでつとめて明るく行くこうぜとフランの先頭に立って奥の部屋へと歩き始めるレオン。

階段を降りると最近に舗装された場所も終わり、むき出しの岩肌
が迫ってくるように見える道へ足を踏み入れる。

天井や左右の壁に埋め込まれた魔法の光で多少の明るさはあったが不気味な静けさがあった。肌でそれを感じた誰もが表情を引き締めて知らずに無言になっている。

「大丈夫か？」

背後にいるフランに気遣ってレオンはそう訊ねたが返事はない。もう一度だけ呼びかけて大丈夫かと訊ねたが上の空だった。

レオンはしっかりと手を握ることで自分が守る意思表示をしなれば儂く消えてしまいそうなほどに思えた。杞憂ならいいが、脳裏にはウォーラムの姿が過る。

「痛いすツ！！」

「あ、ごめんな。考え事をしていた」

「いいえ。すいません」

「どうして謝るんだよ？俺が悪かったんだぜ」

「いいえ…あの…」

フランは振り返るレオンからも目をそらせてまた無言でうつむいた。レオンは強く握った感覚は無かったが知らずに自分も緊張していることに気づかされる。

道は親方でも通れるほどの広さはあったが体感するに半分ほどに思える圧迫感があった。それは魔法の光のせいだと光を睨みながら歩みを続けていると徐々に道は広がって一つの大きな部屋に出た。人が立ち止まり、人だかりが出来ていた。

「行き止まりか？」

「扉があります。あれが神殿への入口？」

「そうみたいだな。だが魔法士が魔法を唱えているのも無駄だな。こりゃ扉が開かれたってのは何だったんだ？」

人だかりの隙間からは鍵を解除する魔法の光が漏れて見える。一人ずつ腕に覚えがある魔法士が詠唱を続けるが青白い装飾をされた青銅らしき扉はピクリとも動かなかつた。

一人、また一人魔法を辞めてすごすごと戻っていき、ついにレオンは先頭になった。

天井すれすれまである背が高い扉は横幅も数メートル以上ある。とりあえず触れて壊せそうな脆い部分がないかを確認したが見つからない。

「扉が開いたって話だが、これは？」

「開いたのは階段の先にあった第一の扉。これは第二の扉になります」

扉を監視する神殿に仕えるカムイを着る信者がレオンの疑問にそう答えた。

「扉つてのはたくさんあるのか？」

「神殿へ続く扉は三つ。これを抜けると神殿の内部には入りませんが祭壇へ行くにはもう一つの扉が開かないとなります」

「扉がまだあるのか。だったら奥には誰もいないのか？」

「はい。扉が開いたのはもう何十年何百年も前の話になります。生きた人間がいればとづくに死んでしまっている」

「だったらさっきのウォーラムはどっから来たんだ？ここで召喚した奴がいたのかな？」

信者へ素朴な疑問を口に出してフランを横目に見る。レオンと同じように扉に触れていた。

「あの召喚獣はこの扉の奥からヌツと姿を現しました。半透明な身

体だったので扉の傍で召喚され、具現化される前に扉をすり抜けた
と思いましたが…」

「思いますが？」

「さきほどの話の通り、生きた人間がいればとつくに死んでしまっ
ています」

「別の道があつてそつから神殿へ入つたんじゃないのか？」

「あり得ません。神殿への道は一つしかありません。海の外からも
別の入口を探した歴史はありますがどれも見つからなかったと一致
しております」

信者はそう言つてイタズラか何かだと思しますので心配しないで
くださいと付け加えた。

「もちろん我々の仕業でもございません。ウォーラムが出たという
前例は聞いたこともありませんのでやはりイタズラではと思います」

「扉の奥から出てきたように見せる方法はいくつもあります」

「それに魔術師が騙だまされるつて考えるのも何だと思つぜ。なあフラ
ンツもついいだろう？」

信者からフランへ向き直り諦めようと言おうとした時、フランの
身体からまたあの青い炎が発しているのが見えた。

小さな炎で目の錯覚かと思つたほどにうつすらと燃えている。レ
オンはフランの視線を追つて扉の上部を見上げると扉の縁も同じ青
色に輝いているのが見えて訝しげに目を細めた。

反応しているのは間違いない。やはりフランと関係があるのだろ
うかとレオンは不安に思つた。

「…この奥にいるの？」

フランの声。

誰かと話しているように相手を思わせる妙な間があった。うん、とうなずいて扉の端へと扉へ沿って移動し始める。

レオンと離れていくフランが縁際で立ち止まる。

その細く白い腕がカミイの裾からすうーっと現れて縁の青い炎に触れる。

「レオンさん。開きます」

レオンはその声に従って数歩下がると遅れて足元が揺れ始めた。周囲を見回すざわめく人々がまた来るのか、と呟いた。

扉の炎は静かに消えてフランを包む炎も共に消えた。ゆっくりと終息する揺れを吸収するように扉がつつすらと開いてその奥の景色が見えた。

手入れされていないのに美しい光沢を放つフロアがあり、宝石に似て人々を魅了する。誰もが悦に浸りながらも我先にと中へ雪崩れ込んだ。

「どうやって開いたのでしょうか？」

信者は興奮した様子でフランに訊ねる。

「たまたまタイミングが合っただけさ。中へ入ってもいいかい？」

「ええ… あ、あの… あつと…」

「さあフラン行こう」

それ以上詮索されることも嫌だと思ったレオンがそう答えてフランを中へと連れて行った。

光沢が放たれたフロアは歴史以上の価値がある量で埋められて足で踏むのももつたいたいと感じて素足になる人々も大勢いた。

掘り返して一部を盗もうとする人間もいたがフランにどうやって

開けたか、と訊ねてくる人間がいなかったことに安堵するレオンがフランの手をぎゅっと握った。

「絶対に何があっても守ってやるからなッ」

「…レオンさん」

不安を感じているのは自分の方かもしれない、と自嘲めいた言葉を胸中で吐いたレオンは手を離して先を急ごうと言った。

ただっ広いフロアは壁も天井も同じ素材でできている。光沢を放つ青が入った白色のブロックを詰めこまれてあり、濁って鏡のような反射はない。大理石に似ている素材だった。

神殿と言うよりは墓場のように見えるのはあまりにも殺風景だったからだろうか。

レオンは歩みを進めて神殿の奥の三つ目の扉とやらを探すことにした。

「扉が開いたことをどうしてわかったんだい？」

「また声が聞こえました。縁に触れて開いて欲しいって願えばいいって」

「願ったのか？」

「…はい」

「どんな声だった？」

「可愛い声でした」

「可愛いね。まあ嫌な気がしなかったのなら相手も攻撃を仕掛けてくることは無いと思うんだが…ううん…」

「レオンさん…？」

「うん？ああ俺の考えすぎならいいけど警戒はしておくぜ」

レオンはそう言うとフランは浮かぬ顔をしていた。

その理由も知らないふりをして歩き続けて五分してようやく三つ

目の扉が見えた。

外見はさきほどの扉に似た青銅の扉だが、中央に窪みがあり円形の何かが埋まっていたと思われる。

「声は聞こえるか？」

「いいえ」

「何か感じるか？」

「いいえ」

扉の前で短いやり取りをする二人。

レオンは手で触れた。門扉にはひんやりとして滑らかな手触りがあつたが中央の窪みだけが熱を持っていた。

あの青い炎が填まっているのを想像して頭を振った。

「何か見えるか？」

「見える？」

「たとえば炎とか青い炎」

「青い…炎ですか…？」

フランは考え込むが全然憶えていない様子にレオンは何でもないと答えた。

「俺にも普通の扉にしか見えないぜ。これを開く鍵も見当たらないければ…諦めるしかねえかな？」

「…」

「奥にいるとも限らない。声つても…ってフラン？聞こえているか？」

「…え？」

「だから」

「聞こえないッ！！もっと大きな声でッ！！」

レオンの返事ではないと気づいたのはフランの視線だった。
明らかに扉の奥の何かに向かって叫んでいる。レオンには聞こえない声がフランを呼んでいる。

「ッ！！危ないッ！！」

扉の奥から迫る音の波に反応したレオンはとっさにフランを抱いて扉の前から逃げた。

次の瞬間、扉の中央の窪みに青白い光の玉が現れて光を放射線状に放ち始める。その光の球体にヒビが入る音がした数秒後、光は割れて扉が開いた。

中から人ならざる何かが青い炎に押されて後方へ吹き飛ばされていく姿が横切った。

レオンは炎からフランを守るように丸まった。背中が燃えるように熱くて振り返ることさえ出来ない。

熱風に抱かれた悲鳴も神殿の入口辺りから聞こえて炎の大きさを知る。

「何があつた？」

扉の中にあつた全てが放出されてようやく振り返ることが出来たレオン。

周囲の宝石に似たブロックには焼け焦げる跡もなく、奥にいた腰を抜かした学者達も魔術師が展開する多重層結界に守られていた。不自然に開いた神殿中央のスペースには吹き飛ばされて現れた人ならざる何かが立ち上がるうとしているのが見えた。

「何だ…あれは…」

灰褐色の皮膚で覆われた背の高く細い人間がドロドロと溶けて足元に灰色の水たまりとなる。

魔術師はその光景に警戒しながらも結界を解いてその何かの動向を探った。灰の水たまりはぶくぶくと気泡を表面に浮かばせて形状を変えようとしたが、うまく整えられずにまた水たまりとなる。

やがて動きが止まり、表面から黒煙と白煙が別々の方角へと流れている。

「これを吸い込むなッ！！これが本体だッ！！」

誰かが叫んだ。

煙はその声に反応し逃げようとする人々よりも速く、その四肢に巻き付いて絞めあげる。

運よく逃げ切れた人間達は助けようともせず、我先にと入口へと走り続け、広い室内には煙に抱かれた人間とレオンとフランだけが残された。

「フラン…俺達も逃げるぜ」

「ダメッ！！私を呼んでいる声がします」

「そんなことを言ってもッ」

煙に抱かれた人間はやがてずると煙を発する灰色の水たまりに引きづり込まれ始めた。

「行かないと…私は行きます。レオンさんは助けてあげて」

「助けるっ たつて…一体何をすりゃッ」

「お願いします」

フランはレオンの手を解いて開いた三つ目の扉へと走っていく。その後ろ姿を追いかけようとしたレオンを呼びとめる煙に抱かれた

男達の救いを求める声。

迷いながらも剣を抜いて灰色の水たまりへ走った。逆さに構えた剣を突き刺して自身はさつと後方へ逃げる。刺さった剣先を表面の泥が溶かしていく。ジュツと煙をあげて折れていく剣の柄がころんと転んだ。

「何だつてんだッ!!」

レオンはゆっくりと中央へと縮小していく黒煙と白煙を腕を頭の前で交差しながら突き破つていき、二つに離すことに成功した。

先端しか残っていない黒煙や白煙を自らの魔法で引き剥がす魔術師がレオンへ礼を言つて結界を展開しながら逃げ出した。

「はあはあ…重くなる…」

身体に付着した煙がレオンの動きを制御してくる。それに抗うが重たくて耐えているだけでやっとだった。

グググつと水たまりへ引きずり込もうとする力に足を踏ん張って耐えるレオンに水たまりから白煙と黒煙が同時に襲いかかってくる。避ける力も残っていない、と観念したレオンの全身を煙がすっぴりと覆いかぶさった。

「クソッ!! 離れやがれッ!!」

身体を包もうとする煙を千切つて投げて抵抗するが、投げられた煙はふわりと浮かんで戻ってくる。

ぎゅうぎゅうと押し込んでくる煙を押しつけようともした時、背中にもあつた煙に押されてバランスを崩して傾いたレオンの身体を一気に水たまりへ引きずり込もうとする。

フロアに水平に滑る身体がぐんぐん、と頭上にある水たまりへと

進んでいく目の前に剣の柄が見えた。

「次は折れるなよッ」

煙から手を出して剣の柄を掴んでフロアのブロックの隙間へと挟んだ。手がしびれるほどの衝撃があつたが決して離さなかつた。

しびれがレオンの全身を抜けて煙へ流れたのか、煙はふわっと浮かんでレオンの身体はフロアへと投げだされた。

「何とかなつたか…はあ…はあ…」

折れた剣の柄を支えにして身体を起こすレオン。煙は水たまりへと吸い込まれていくのが見えた。

「今の内に…はあはあ…フランを…」

レオンは折れた剣を構えながら後ずさりしながら背後にあつた三つ目の扉へ向かつた。

追いかけてくる様子もなく表面に気泡を浮かべて佇む灰色の液体。レオンの身体は三つ目の扉をくぐり終わると扉はバンと勢いよく閉まつた。

「一安心つてか…それとも畏にはまつたか…？」

鞘に折れた剣を押しこんで踵を返したレオンはフランを追いかけ走り始める。

長い一本道。長方形の整えられたブロックに囲まれた道をひたすらに走り続けた先に祭壇の間と思われる広場があつた。ドーム状の建物で天井の立派な金色の装飾が施された縁にそって水が流れて壁を濡らしている。足元にある小さな穴に水は吸い込まれて床の下へ

と流されているのが音でわかった。

祭壇は中央にあつてそこにはフランが何かを仰ぐように立っていた。その視線の先には青白い光があつてゆらゆらと浮き沈みを繰り返している。

「レオンさんッ」

「安心してくれ。全員逃げられたぜ。後は俺達だけだ。出口は他にないのか？」

足音に気付いたフランがレオンに振り返る。レオンは振り返ったフランにこう訊ねながら近づこうと歩くと青白い光がすごい速さで振動し始めた。

とつさに剣を構えようとして柄に触れたが折れていることを思い出して手を離れた。その場で光はくるり、と回り泣きつくかのよう
にフランの掌へと舞い降りた。

「怖がらせないでください」

「怖がら…怖がる？」

「はい。この子が怖がってしまいます」

フランは指の腹で光を擦って大丈夫だからね、とほほ笑んだ。レオンは首を傾げながら近づいてフランの背後から青白い光を見おろした。

光の中には全身青色の羽根付きの妖精がいて泣いている。

「呼んだ声の正体はこれ…なのか？」

「はい。フェリアっていう名前にしました」

「しました…って」

「人間の言葉では発音が出来ないのでそう呼ぶことにしました。可愛いでしょう？」

神経が太いのか、マイペースなのか。フランはさきほどの光景を見ても焦る様子もなく掌の中のでフェアリアを夢中で撫でていた。指には青白い粉が付着してあった。

「可愛いのはいいが。さっきのあいつがこっちへ来るかもしれない。そいつも連れていけるならさっさと逃げよう」

「フェアリアです」

シルクくんは妙なこだわりを見せたのを思い出した。

「フェアリアか…そうだな。よろしくフェアリア」

レオンも調子を合わせて掌にいるフェアリアへ触れようとした時、扉が壊された音がした。

「もう来たかッ」

「あの灰色の水たまりが狙っているのはこのフェアリアです。もっと言えばフェアリアに眠る水の精霊の力」

「フェアリアってのは精霊なのか？」

「媒体です。フェアリアに魔力を与えると水の精霊が召喚出来ると言っています」

「言葉がわかるのか？そりゃ勉強したかいがあったなッ」

レオンは部屋中を見渡して逃げ場を探したが見つからない。ただ祭壇があるだけの部屋。壁際にある小さな穴はとも入れそうになり。出口は一つだけでそこから迫ってくる灰褐色の水たまり。

おそらく足音から形状を馬や鹿などの四足の動物に変えて走ってきているのがわかった。

「魔力を与えればあの灰色を退けることが出来るのか？そのために力を貸してくれって呼びかけてきたのか？」

「わかりません。言葉の全てを理解出来なくて…ただ魔力を与えてもらいたいって」

「だったら与えてやればいい。時間はあまり無いぜ」

精霊をどうして狙っているのかもわからないが二人は何かに巻き込まれて今ピンチだっことはわかる。

頼りになるのは折れた剣だけは心もとない。せめて時間を稼げば何とかしてくれるって言うなら折れた剣よりかは心強い。

灰褐色の足音がゆっくりと止まり、姿を現した。馬の姿に似た灰褐色の存在。

「あれも何だつても全くわからねえぜ」

レオンは剣を抜くと不安が増した。改めて近くで見ると圧倒的な迫力があり、身体も数メートルある。こっちの味方は掌サイズ。

ふんツ上等だぜと気合を入れて剣を握る腕に力を込める。いなくなかく灰褐色の馬もやる気らしいのが目に見えてわかる。

「レオンさん…私…魔法は使えません…」

「何だつてツ?!」

「魔法なんて使ったことありませんツ!!」

魔法を自然に発する力を自覚していなかったのか。スウィニーの時も扉を閉まる音で目が覚めて札が何なのかも気休めだと思っただに違いない。

これでシルクくんを魔力で動く機械人形だつて言ったことを知らないことも説明がつく。

「だったら一度逃げるぞ。祭壇から降りてくれ」

「ダメです。この子は祭壇が魔法陣となっていていますのでここからは動けません」

「動けないだつてツ?!それでも…」

灰褐色の馬が目を離れたすきに音も無く突っ込んでくる。避けられない。背後には祭壇があつてフランがいる。

「だったらフェリアを掌で包みこんで願ってくれ!!」

「願う…?」

「ああ。願いつてのは叶うもんなんだぜ。魔力つてのは人の意思の強さだぜ」

「人の意思…?」

「フランがその子を思えば願いは届くもんだぜ。それまでは何が聞こえてもジツと目を閉じて願っている!!いいか?絶対に目を開けるなよ」

「は…はい」

フランは言われた通りに目を閉じてフェリアを掌に包みこんで祈り始めた。微量だが魔力を発する体質がある。時間さえ稼げれば魔力は蓄積されて召喚出来るはずだ。

「上等だぜ!!守つてやるよ。俺が必ず守つてやる」

そう言つて灰褐色の馬へと自らも剣を構えて駆けだした。

トランス

馬の右前足をすくうように斜めに斬りあげる剣が大げさに空振りした。寸前で跳躍した灰褐色の馬はレオンを無視して祭壇へと突進を続けた。

ドン、と祭壇に体当たりをしたが半透明の魔法の壁が攻撃を阻んだ。レオンはその背後から斬りかかり後ろ足を横へ両断したが腕に感触はなく、虚しく空気を薙ぐぶおん、という音が室内に響いた。力任せに振った剣の勢いに身体ごと持っていかれたレオンが体勢を崩した。

「見せかけか？」

すぐに体勢を整えなおして構えるが灰褐色の馬はこちらを見ることもしない。ただ真っ直ぐに半透明の結界に守られた祭壇を見おろしている。

細い瞳が弓なりに歪んで睨みつける視線の先にはレオンの言った通りにフェリアを握ったフランが祈りを続けていた。

「だったらまずは本体を探さないでッ」

レオンは胴体の真下へ潜り込んで闇雲に剣を振り続けたが宙を薙ぐ軽い感触に焦りだけが募る。

馬はいななき、前足をあげてさらに高い位置から祭壇に襲いかかる。半透明の壁と蹄の接着面に魔力で出来た摩擦が生じて青色の火花が散って馬は後方へよろける。

半透明な壁も無事ではなく、小さな亀裂が入っていたのを見上げてレオンは無力を実感する。

馬は小さく右前足で足元を探って身体をグツと沈めた。勢いをつ

けてもう一度体当たりするつもりのようにだ。

「何だ…剥げた…？」

灰褐色の馬の足から灰色の一部が剥げてパラパラと足元へ落ちた。目を凝らして確認してみると部分的に剥けているのが認識出来る。いずれも中には黒や白い塊が見えてさきほどの煙を思い出させる。おそらく本体だと思われる。

レオンは我慢出来ずに確かめるためにも剥げた一部へと攻撃を仕掛ける。膝の少し下にある黒い塊へと一撃を加えると感触があった。剣先に粘着質の液体がまとわりついて重くて振り抜けそうもないがグツと全力を注いで、足りない分は体重も乗せて剣を押しした。

剣先は宙へ投げ出されて自らもその勢いに吹き飛んだ。黒い液体が周囲へ散ってフロアを溶かした。ジュツと煙が立ってやがて消えた。

「はあはあ…気の遠くなる作業になるぜ」

糸口を見つけたレオンは内部が見えている部分を集中的に攻撃し続けたが威力は感じられない。馬は痛みを訴えることも身体を小さくすることもなく、また体当たりを辞めることも無かった。

ふらふらになりながらも剣を振り続けるレオンが放つ一撃がついに止まった。白い液体をすくうほどの膂力も残っていないので突き刺さった剣を押しすることも出来なくなり剣から手を離してしまった。

「はあはあ…喰って…喰ってやがるのか…はあはあ…」

手を離れた剣が飲みこまれていき、やがて元々折れて短かった剣さえも体内へ飲みこまれてしまった。

魔法を使えないレオンが持つのは拳だけ。辺りに使えそうな武器

を探したが見当たらない。疲れて視界も悪くなり、情報を整理する思考も停滞してくる。

だが何もしいないよりは動け、と自らを鼓舞して走りだす。素手で塊を掴もうとした時、チツと静電気に似た何かが身体を貫通して意識を失った。

「レオンさんッ!！」

フランは目を開けてレオンの名を呼んだ。

掌の中にいるフェリアがレオンの意識が飛んだことを伝えてきたからだ。フェリアは続けて魔力をお願い、とフランへ催促し続けた。

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

「みゅーみゅー」

「私のせいでレオンさんがッ…」

「みゅーみゅみゅみゅー」

「ごめんなさい…何を言っているの? ねえ教えて!! 私にある魔力なら全部あげるから」

掌にいるフェリアへと思いを込めて願い続けたが何も起こらない。ドスン、と祭壇全体が揺れる振動がまた来る。灰褐色の馬が体当たりをしている姿が見えて震える身体。ギョツとすぎるようにフェリアを抱いた。

「どうして私なの…? 何も出来ない私…城でもずっと一人だったから私の名前を呼んでくれて嬉しかった。必要としてもらったのが嬉しかった」

「みゅみゅ?」

「レオンさんに迷惑をかけてあなたにも何も出来ないのが私なのッ!! お願いだから教えて…そうじゃないと…」

逃げてしまいそう、と言いかけた言葉を飲みこんだ。ドスン、と体当たりする馬の目がジツと睨みつけてくるのが怖くて目を開けていられなくなった。

この掌にある小さな温もりにすぎる弱い自分を罵る別の自分がいったりして心の中はぐちゃぐちゃだった。

「精霊の血を受け継ぐ者よ…私は水の精霊。魔力を解放すれば…を…」

「ッ！！声が…声が聞こえた」

「みゅー？」

鮮明に聞こえた声に掌を開けると首を傾げる小さな少女がいてまたみゅーとしか言わなくなる。

「どうして…どうしてなの…」

フェリアをギュツと掌に押し込んで胸の真ん中へ抱えるフランがそう繰り返した。

何度目かの体当たりの後、ついに半透明な壁の一部が欠落し、破片が目の前へとひらひら舞い降りてくる。落下の最中に透明な滴になり、祭壇へ落ちた時にまた声が聞こえた。

「あなたの力を解放しなければあなたの心は死んでしまう。そしてあなたの心の死は精霊を永遠の眠りへと誘う」

「力の解放…？」

「精霊を繋ぐ血。現世へと召喚し命を謳う者へ」

「何を…何を…ねえもつと教えてッ！！」

声は消えた。

次々と剥がれる欠片が水滴になり、祭壇へ振る度に声が聞こえる。抑制された力の解放、世界の理を紡ぐ、時が満ちる、断片的に聞こえた言葉に疑問符を投げかけても返事は沈黙へと葬られる。

まるで世界に一人だけが不実なようにフランは強い孤独を感じ始めた。あの塔へいた時と同じあらゆる声や音や光が一方的に情報を伝えてくる。

「助けて…お願いだから私を助けてください」

届かない叫びをフランの震える唇からこぼれおちる。

その時、脳裏に過つたのは時計台に立ち手を広げる勇者様の姿。レオンさん…と小さな声でフランは呼んだ。

「何があるうと守ってやるよ」

ふいに浮かんだレオンの優しい声。

フランはハッと顔をあげてレオンの方を見る。倒れたレオンが震える上半身を起こして立ち上がるうとしていた。

「あなたの血に眠る私の力を…名はセイラム。水の精霊」

「セイラム…？」

その名をふいに口にした時、掌がほんのりと暖かくなった。

フランは視線を掌へ向けると指の隙間から青白い光が見えている。弱い光。数秒すると消えてしまった。

レオンが立ち上がり馬へと駆けだした。足首にある黒い塊を掴んでグツと引っ張っている。長い金色の髪の毛が逆立ってレオンの全身にわずかな青い火花が散っていた。

「離れるってんだ」

レオンは強い口調で灰褐色の馬へ言った。

肩につけてあった革の鎧がパンと弾けて壊れたのも気にせず、力を込める腕に巻き付き始めた黒い煙。ギョツと腕を締め上げる音が耳に聞こえたのが逆に反骨心を蘇らせた。

痛みを忘却の彼方へ投げ捨てて意識を黒い塊へと注ぎ続ける。レオンはただフランを守りたいと思っていた。

「ッ」

灰褐色の馬が動く、とレオンの身体が宙へ投げ出された。巻き付いた黒い煙も塊へと戻っていく。

願いが通じたのか、そうではなく助走をつけるために後方へ戻ったのだ。レオンの投げ出された身体も背中から地面へ落ちて息が出来なくなる。

それでもよろよると立ち上がった視線の先にあったのは灰褐色の馬のお尻。四本の足の隙間から見える祭壇との距離はずいぶん離れた。

「よしッ」

と口に出した時に視界が歪む。気が緩んだせいで痛みが全身に戻ってくる。特に絡みつかれた腕が千切れそうに痛い。

ダラリと垂れた腕をもう片方の手で擦って感覚を取り戻しながら灰褐色の馬の前へと躍り出る。

「もう一度、止められるのか…」

前足でフロアを蹴り勇む足取りを見てタイミングを合わせようとしたレオンの頭上を無情にも飛び越える灰褐色の馬。

全身のバネを伸ばして半透明の壁にぶつかりと部屋全体が揺れて天井を支える支柱の一部にも亀裂が入り始めた。崩壊を彩る音色は鈍く重たい。

ドン、と額を強く押し当てる灰褐色の馬へとレオンが追いついて触れようとしたが軽い跳躍で後方へかわされる。

レオンは遠くへ離れた灰褐色の馬を追わずに祭壇の手前で立ち止まった。

「大丈夫か？」

「はい。それよりもレオンさんが怪我をしています」

「心配ない。だが止められるのは難しい。それに柱を見ると建物ごと壊れるかもしれない」

背後にいるフランへ声をかけるレオン。視線を壁際にある柱の方へ見上げて深く息を吸った。

「まだ何か聞こえるのか？それと話せるなら今の状況を伝えて祭壇からいったん逃げないかって相談してくれないか？」

「一方的に声が聞こえるだけで話は出来ません。ただ…ただ…」

離れないと危ないことはフランにも理解出来るがこの掌の温もりを肌で感じ、この声を耳で聞いているとどうしても離れられなくなる。

そのせいでレオンを傷だらけにさせていることも充分と理解している。

「レオンさんは逃げてください。私は残って何とかしてみます」

「フランが逃げないのなら俺もここへいるぜ」

「どうして？私達は知り合っただばかりです」

「約束したろう？何があるうと俺が守ってやるって」

半分だけ振り返りレオンは弱い笑みを浮かべてフランへ言った。
だが不安はある。手には剣さえもなく頼りの妖精も黙ったままで
おまけに目の前に見える灰褐色の馬は未だに闘志をむき出しの瞳を
している。

「…はい」

「ハハハ。不安そうな顔をするなよ。必ず俺が守るからその小さな
…えっと…名前なんだっけ？」

「フェリア…違う。セイラムって名乗っていました」

「セイラム…水の精霊セイラムか」

レオンがその名を口にした瞬間、フランの掌から光が溢れる。あ
まりの光の勢いに包みこんでいた掌を開くと光は天井すれすれまで
伸びた。

「待つてはくれないかッ」

灰褐色の馬は跳躍し祭壇へと襲いかかってくると思ったが狙いは
さらに上だった。頭上に輝くあの青白い光が形状を変えて掌の中の
妖精に似た姿になった時、灰褐色の表面を覆う何かが剥がれ落ち、
白と黒の塊は入口付近へと弾き飛ばされた。

ゴロゴロと転がる塊はその道中で一つの塊へと重なり合う。まだ
ら模様の塊も形状を変えて人の形になった。肩の位置に馬の頭部が
現れて模様の白色だけが吸い込まれていく。全身黒の人間に白い馬
が肩に乗っかっている姿が定着すると身体に線が入り次第に輪郭や
衣服を形成し人らしくなった。

最終的に黒いスーツを着た若い男となった塊が笑った。

「召喚か…ふははははは」

「何を言っただやがるんだ？人間なのか？」

「いいぞ。精霊の血を引く女もセイラムも同時に頂くとするか」

男はそう言ったが動きは見せなかった。レオンは注意深く見ているとまだ変化しきれていない部分が足にあった。

「リアムの少年と精霊の血を引く少女。召喚を感謝いたします」

「ではあなたが私を呼んだ人…？精霊の血を引くなんて私ですか？」

「ええ。あなたには我々の血を解放する力があります」

「解放する力？」

「そう解放する力。この世界を再び混沌へ落とそうとする闇の手から救うための力を得るのです」

「闇の手…？」

「そうあの目の前にいる男も闇の一族のひとり。精霊の力を得て世界を崩壊へ導こうとしております」

精霊の言葉で男へと視線を向けるフラン。男は不気味に笑みを浮かべて精霊に待っていると指差して狂ったように叫んでいる。

「話は後にしてくれッ。あの男はもうすぐ動くぜ」

「レオンさん？」

「フランどうした？」

「あの…レオンさんの身体が…」

「身体が？何だこりゃッ?!」

レオンは全身を包む青白い光に気づいた。頭上で輝くセイラムと同じ光が全身の傷を癒してくれている。

「リアムは精霊を守る戦士でした。その身に精霊の力を宿し異形の

闇と戦う力があります」

「ただの噂や迷信だと思っていたぜ」

「その瞳にある白い輪が戦士の証。精霊の加護を受けた肉体はやがて大いなる力の器となる」

「やがてツて言うのが困るぜ。俺は今欲しいんだ。出来れば目の前の男を倒してここから出られるくらいにな」

「願えば戦う力を与えましょう。その身に精霊を宿すトランス状態へとなる素質があなたにはあります」

「トランスか：精霊が俺に力をくれるなら俺は願うぜ。フランを守る力を俺にくれ」

レオンはそう言って天高く掌を掲げた。

頭上にいるセイラムは目を閉じて何かを呟き始めると膨大な魔力が身体に流れ込んでくるのを感じる。何層もある意識を破ってレオンの心の最も深い部分へと精霊の力がそそがれていく感覚が全身をめぐる。

通常感覚がごっそりと削げ落ちて代わりに夢の中にいるような錯覚があった。自分の身体が自分ではないような感覚があつて同時に誰かが存在する温もりも感じる。

「これがトランスか：すごい」

レオンは自らの両手を見て力を感じる。身体の表面が白い光で包まれて全身を波打つ青色が掌へ集まってくる。

掌を上へ向けると青色の波がそこで溜まって形状を剣へと変化させた。グツと剣を握って斜めに払ったのに反応するかのように外側の水の流れが増した。

「トランスか：厄介な。だがその力はまだ未熟」

「そのわりには焦っているのが見えるぜ」

「ふんっ。頭に乗るなよ小僧」

男は低い体勢で駆けてくるがレオンにとっては何もかもが遅すぎた。数回のステップで男の攻撃をかわしその開いた胴体を剣で薙いだ。

苦悶の表情を浮かべて剣で斬られた傷口を手の腹で押さえる男が後方へ跳躍し体勢を整えた。

「強いッだがこれはどうかな？」

男は白い手袋を外して掌を足元へと押し当てた。

足元が波打ち、波紋を広げていく中を闇が侵略していく。やがて真っ暗な円が足元に描かれると土人形のような闇が円の中から生えてくる。

その数は膨大だった。波紋はさらに広がり入口付近から室内の半分へと陣地を広げ闇を拡大させた。

「クククク…数は増えるぞ」

「数だけいたって勝てないぜ。俺にはわかる」

「どうかな？楽しみだ」

男は足元へ当てた掌を垂直に立たせてレオンへ向けるとそれを合図にうごめく闇が一斉に襲いかかってくる。

軽い跳躍をしたレオンは流れるような剣技で闇を両断していく。それは踊るように優雅に。一筋の青色の線だけを残して闇が悲鳴もなく消失する。

そして大半の闇を切り払った後に円の中へ入り青い光を放つ剣を突き立てた。

「これで終わりだ」

と言って両手で剣を押しした。剣先は見る間に闇へと埋まっていく。剣先から流れる波紋が男の足元へと闇を押し返していく。

男は後方へ跳躍したが間に合わずに自らの闇に全身を飲み込まれた。

「バカな…これが精霊の力…こんなにも差があるのか」

「そうこれが精霊の力さ」

「ふははははは。ますます欲しくなった精霊の力。今はお前に預けておくことにしよう」

闇にすっぽりと全身を包まれると男は闇と共に消失した。

レオンは剣から手を離すと同時に力が抜けていくのを感じた。全身の白い光が消えて通常感覚が戻ってくる。心の奥にいた誰かが完全に消えると入れ替わりに疲労がのしかかってその場にへたりこんでしまう。

「はあはあ…」

「レオンさん」

「大丈夫だったか？フラン。それにセイラムもって光がない？」

フランが駆けよってくる。レオンは半身を振り返りフランの無事を確認した後に頭上を見上げたがセイラムの姿は見えない。その代わりにフランの掌にちょこんとフェアリアの姿があった。

「消えたのか？まだ聞きたいことはたくさんあったんだが」

「はい。私も聞きたいことはありますがレオンさんの身体の光が消えたと同時に光はこの子に戻りました」

「そうか…まあ無事で何よりってことだな」

乾いた笑みを浮かべるレオンへフランの掌のフェリアが飛んでいく。
肩や背中や腹の表面に鼻を押しつけるフェリアがレオンの胡坐こくざをかいた太ももの上へ着地する。

「みゅーみゅーみゅー」

「何を言っているんだかもわからないな」

「みゅみゅみゅー」

「ハハハ気に入られたみたいだぜ」

フェリアはレオンへ向かって両手を仰ぐ姿にほほ笑みかけるレオン。

だが手を動かす力も残っていない。フェリアは太ももの上で立ち上がり羽根を広げた。そして小さな光の球体となりレオンの頭の中へと入り込んだ。

「あ？何だ？」

みゅーみゅーと頭の中で聞こえる声に驚くレオン。
さっきの感覚に似ていることから心の中に現れた誰かはこいつだ
つてことがわかった。

「精霊は気に入った人間の心へ住むことがあります」

「いいのか？神殿を留守にすることになるぜ」

「ふふふ。レオンさんらしいですね。身体に入られても何も言わずに住ませてあげるんですね」

「まあ俺も親方のところへ住みついたからな。気に入ったんなら歓迎するつても教わったことの一つさ」

レオンの疲労がいつしか消えていることに気付いた。立ち上がる

と身体の軽くなった気がした。

「はあ…大変だったが無事でよかった。色々思うことはあるがまずは帰ろうか？」

「はい。ここへ残ってもわからないことだらけです。フェリアがいるので話はまたいつでも聞けますしね」

「出てきてくれりゃな。やっぱりさ…心の中にいるってことは俺の思い出を枕にしてんのかな？」

「ふふふ。さあどうなんでしょうね」

「まあいいか。さあ帰ろう」

レオンはそう言って入口へと戻った。

すっかり忘れそうになっていたがもう別れの時間が近づいてきている。フェリアのことを気に入っているならまた会いに行ける口実も出来たと思いつながら三つ目の扉をくぐると背後で扉がゆっくりと閉まった。

第二の扉も同様にレオン達がかぐぐると閉まった。そして階段を登ろうとしたら避難していた人々が大勢いて話を聞かれたが適当にはぐらかして急いでいるからとフランの手を引いて親方との合流地点へと急いだ。

外は夕暮れ。海へ沈むオレンジの光が地平線を焦がしている光景を瞳に焼き付けるように強く瞳を閉じ、たった一日の旅が走馬灯のように流れた。

神殿の手前には海を眺める夫婦や走り回る子供なんかもいてさっきの戦いが夢のように思えた。二人で見た夢をまたいつか話し合おうと決めて広場の方角へ続く長い橋を渡った。

ノアールの姫

まるで似合わない親方と広場に懐かしさを感じてレオンは手を挙げた。その脇にはテッドとミレイとカムイを着た知らない小さな犬族がいた。

合流は広場の中央にある時計台の下。東西南北に向かってベンチが四つあり、その西側、神殿の方向を向いているベンチの前で話を続ける親方と犬族。横目でちらりとレオンを確認しても浮かぬ顔だった。

太い指で輪郭をさすって眉間にしわを寄せているのはだいたい厄介ごとに巻き込まれた時か、巻き込まれそうな時のどちらかだ。

「フラン様、ご無事で何よりです」

犬族の執事はカムイのフードを外してフランに向かってお辞儀をする。

レオンの背後にいるのに返事をしないフラン。振り返り顔を見ると疲労できちんと目も開けられていない様子だった。

「フラン様…?」

「疲れているんだ。話は目が覚めてから聞いてやってくれないか? もう宿は手配してあるんだろ?」

「何かございましたか?」

「何かあって? 思い当たることあるとか?」

そう訊ね返すと執事は言おうか言つまいかを悩みかねている表情をしたのち、こつ切り出した。

「神殿で騒ぎがあったと聞いて、もしもそれがフラン様の体質に関

係があるのならば思い当たることはございます」

「まどろっこしい言い方だな」

「それでいかなのでしょうか？騒ぎの原因を教えてくださいただけないでしょうか？」

「原因か…体質と関係あるがどうかはわからないが」

と言って頬をかいて説明をする。ちぐはぐな記憶を整理することなく説明していると話し手であるレオンにもよくわからなくなってくる。だが、執事は大きくうなずいて表情を曇らせた。

その背後にいる親方も深いため息を吐いてあごから手を離れた。

「それで頭の中に妖精が住みついた。何でもいいかって思ったからそのまま橋を渡ってここへ来た。これが俺の憶えていることだぜ」

レオンが言い終わるとフランが寄りかかってくる。身体を支えて空いているベンチへと座らせるとふいに寝息を立て始めた。

「魔力の放出をした後は必ずそのような状況になります」

「その言い方だと初めてじゃないようだな。塔にいた執事ってのは

…えっと」

「スイフでございます。フラン様のお付きの執事をしております」

「だったら手紙を送ったのも？」

「はい。私でございます」

「回収も自ら来るとは目を覚めたらフランも喜ぶぜ。これで少しは安心出来る」

「いえ。ここへはフラン様を迎えに来たわけではございません」

「何だつてツ？」

スイフはキツパリとそう言うとレオンは複雑な感情に戸惑いながら顔をあげてスイフを見つめる。ベンチに座ってもさほど視線が変

わからない小柄の犬族。見た目では年齢がわかりにくいのがある意味特徴だと言える。

「次の仕事はフランをアソイヤ火山へ運ぶことになる」

「請けていただけるのでしょいか？」

「仕事の内容も報酬も申し分はない。だが船に危険が及ぶとなった場合は全てを放棄せざるを得なくなる」

「連絡は常に取り合っておける状態にしておきましょう。放棄された場合でも手付金はお納めください」

「…よかるう。これで交渉は成立。後はダイアルリングのチャンネルで詳細を定期報告する」

「はい。ではその都度、フラン様のご容態についての報告と依頼の経過報告をお願いいたします」

親方がそうレオンへ告げるとスイフは振り返り親方と話を進めた。レオンは腕にフランを抱きながら話を摘まんで聞いたがまだ一緒にいられる時間の猶予が伸びたことくらいしか理解できない。それが手放して喜べる状況でないのも肌で感じた。

スイフはちらりと名残惜しそうにフランの顔を覗いてからカムイのフードをかぶり居住区がある市街地へと歩き始めたのをジッと見送った。

「どうなってるんだ？これは」

「話は後だ。今はシアテイルへ戻る。医務室へ届けた後にブリッジへ来い」

「親方：俺がまずいことを言ったのか？神殿のことは言わなかった方が良かったのか？」

親方はただ無言でレオンの問いには答えずに踵を返して船着き場へ戻った。いつもと違う様子に深刻さが伝わってくる。豪快に笑う

こともなく淡々と作業を続けるのは研究施設の移転を手伝った時しか記憶にない。一步間違えれば船も沈むほどの魔力の檻がずらりと並ぶ格納庫の張り詰めた緊張感を未だに憶えている。

腹に詰め込んだ爆弾を破裂しないように歩く運ぶのは這うのでも走るのでもなく歩くしかないと航路を通常の四倍の時間をかけて飛んだ数年前。神殿で見たあの光景、あの魔力はそれに匹敵するのだろうかかとフランを抱き締める手に力が入る。細い腕に細い身体。難なく持ち上げて船へと運ぶレオンはただ素直に喜べない自分自身を呪った。

守つてやるなんて言っておきながらすぐに不安になる。あの時も馬を止めることどころか触れることさえ出来なかった。蚊帳の外。そんな自分出来るのは目が覚めた時、笑って迎えることだけだろうかと考えながら船へと戻る一行の最後尾に並んだ。

ブリッジへ入るとそこにはテッドと親方とカムイを腕にかけたミレイがいつになく神妙な面持ちで対面している。

「話を聞かせてくれ。これは一体どういうことなんだい？」

「あの子を逃がしたのはあの執事の独断だった。国ではなく執事個人からの依頼ということになる」

「それがまずいことなのか？」

「いやそれだけではまずいことではないが問題は理由にある」

「理由：？」

「精霊の血を引く女だと言ったんだろう？」

「ああ確かに精霊を血を引くって言ったぜ」

「間違いない。あの子は十数年前にさらわれたノアール領の小国の

「姫だ」

「何だつてツ?! フランがいたのはエレン領だぜ? 一体…誰が…」

レオンが信じられないと辺りを見渡すが誰もが真剣なまなざしで返してくる。テッドは困惑するレオンへ話を続ける。

「精霊を捕獲するためだ。精霊の力を手に入れて破壊神を復活させノアールと統治戦争を起こすつもりだった。そのためにあの子をさらったがあまりに強い魔力に塔へ閉じ込めた」

「何だそれ…そんな…バカなことつてあるのか」

「執事を中心とした親衛隊が調べたレポートがある」

テッドは小さな情報を入れたクリスタルを指に挟んでどこまで事実かは不明だが、とレオンの掌へ置いた。

「だけど大砲を撃ってきた。あれは知っているから当たらなかつたんじゃないのか?」

「砲撃部隊は親衛隊が持ち場を確保していた。親衛隊も執事も全てあの国から逃げてノアール領へと亡命を終えた」

「だからノアールで受け渡そうとしたのか? だがどうして火山へ行くんだ?」

「精霊の回収へ行く。あの子が精霊を解放しなければならぬ。それも急ぐ必要がある」

「急ぐ?」

「灰褐色の馬はおそらくエレン領の王から放たれた刺客だ。黒いスイツに戻ったという話も一致する」

「闇の一族だつて言っていたな…確か」

「そう。向こうはあの子がさらわれたことに気づいてあの子の処分と精霊の回収を行おうとしている」

「回収? 闇の一族が集めてどうしようつてんだ?」

「闇の一族は精霊に封じられた闇の末裔。精霊がいなくなれば都合がいい。エレンが統治した世界では精霊も消えて自分達の世界を作ることが出来る」

「だとしても俺達と共に行く理由がわからない。こんな船よりもノアールの国に守ってもらえた方が安全だと思っせ」

シールアテイルクラスの戦艦は数百も数千もある。兵士の数も圧倒的に多く、魔術師も多い。

「保護を拒否された。だが精霊を守ることの約束はくれた。そういうことだ」

「そういうこと…そういうことって何だよッ!!」

「ノアールは今、先代の陛下が危篤状態で王位継承権争いの最中。ここで王位継承権を持つあの子が戻ってくることを良く思わない人がいる」

「よく思わないだっつてッ!!親はどうしたんだ?王位継承権だっつてんだったら兄弟か親子だろう?」

「決定したのはあの子の母親だ。母親なんてロクな人間はいない」
「母親がどうして…」

「もう一人息子がいる。あの子が戻ることで王位継承権が一つ落ちることになる。十数年はあまりに長すぎた」

テッドはグツと感情を堪えて淡々と説明する。母親に捨てられた経験と重ねてしまい、少ししかない母の面影がフラッシュバックした。

泣いていた。母は泣いていた。ごめんね、と言う母をレオンは守ることが出来なかった。

「だが資金面での援助や精霊が住む地域の警備を強化してくれる」

「…会つてもくれないうつてか?」

「ああ会うことも話すことも無いだろう。この話もあの子には伏せる」

「嘘をついて言うのか？」

「そうじゃない…ただ黙っているだけでいい」

テッドはそう言って深くうなずいた。

「言いたいことがあるだろうがそれには理由がある。あの子の体質で最も重要なのが感情を不安定にさせないこと」

「爆弾や猛獣でも扱うような言い方だな」

「もつと危ない。あの子の体質は魔力を放出し続ける。問題は膨大な魔力を持つのにコントロールをすることが不可能なことだ」

「本人は魔法を使えないって言っているぜ」

「魔法は習得するもの。魔力は身体にある潜在的なもの」

「だったら魔法を覚えたら魔力をコントロール出来るのかもしれないな」

「無理だ。魔力が強すぎる。今出来るのは感情を安定させ続けること。迅速に精霊を回収するしか方法はない」

「騙して精霊を回収して…それでどうなるんだよ…その先はッ！！その先はどうなるんだ！！」

レオンは激昂し、自らの腕を振ってテッドへ抗議したがテッドは瞬き一つせずその言葉を受けた。

「エレンやノアールには帰れないだろう。ここへも置いておくわけには行かない」

「どうして？依頼が終わればサヨナラってか？」

「安全が最優先される。船を守るためだ」

「依頼は莫大な報酬を得られたから受けた。それで船を買えば…もしも何かあっても魔力を抑えられるような装置も買えばいい」

「必要ない。あの子はこの船の人間じゃない。依頼が終われば降りてもらおう」

「そんなに金が大切なのか？ 依頼なんて断れば…」

「もしも断っていたら闇の一族が精霊を回収した時点であの子は殺されてしまっていただろう。二度目の依頼を断ればノアールで王族の誰かに暗殺されるだろう。安全なのはここにいることだ」

言い返せない事実にはレオンは黙った。強く拳を握って歯がゆさを感ずる。

「考えるのは最後だ。依頼の時は依頼のことだけを考えると教えただろうが。フランはお前に任せる」

親方はそうレオンへ言ったが納得することなんて出来ずにいた。

「…ああ」

親方の迫力に潰された言葉達を飲みこんでレオンは返事をしてブリッジを足早に出て行った。

船の振動が足裏へ伝わってくる。医務室の中、レオンはクリスタルのデータを眺めながらフランの目覚めを待っていた。

「一度、正確な魔力地を計算して魔力を抑制するクリスタルを持たせた方がいいのかもね」

「精霊召喚するのはそんなにも魔力を消費するものなのか？」

「特殊条件過ぎて僕には想像もつかないよ。そしてこっちがレオンの身体なんだけど」

とスウィニーはプリントされた様々な形をしたグラフが散りばめてあり、青や赤や黒などの鮮やかな色がつけてある紙をレオンへ渡した。

紙をちらりと見て首を傾げるレオンへとスウィニーが困り果てた様子で眉尻あたりを掻いた。

「元々の肉体グラフと比較しても何も変わらない」

「だったらトランスってのは何だったんだい？それに体内に小さな精霊がいる分が変わらないってのもおかしいぜ」

「ここの古い測定機じゃわからないのかもね。その精霊ってのも見てみたいんだけど出せるかな？」

「ううん…いる時はいる時でうるさいんだが今は静かだ。眠っているのかな？」

「姿が見えるの？」

「見えるね。小さくて半透明な羽根に青いまだら模様があって同じ色のドレスを着ていたぜ」

「それはいつに消えたの？」

「帰りの橋の途中で気付いて…神殿にいた時は誰も何も言ってこなかったから見えなかったんだと思うとして」

「他の人には見えないって可能性もあるね。それで消えたのは？」

「ああ…えつと…橋を渡り終えて親方が見えて手を振った時には消えていたかな？」

「そうなる？フランの魔力が途切れたのと同時に消えたのかもね。姿が見えている間はずっと消費を続けているとか」

「そうなのかッ?! だったら無理をさせていたのかな…少し…いや結構、話を聞こうとしたから」

レオンは長い橋で繰り返した会話を思い出す。フランに頼んで何を言っているかを教えてもらっていたことも魔力の消費を拡大させたなら、と振り返る。フランの青白い寝顔に言葉を失って視線を紙へと落とした。

「レオンのせいじゃないさ」

「俺のせいさ。神殿なんかに行かなければ良かった」

「親方が勧めたんだろう？観光に行つて来いって」

「ああ。思い出が無いのはつまらないだろうって思ってくれたんだらうな」

「それで最後。執事に渡して全てが終わるはずだった」

「フランは塔へ帰り。また一人で過ごすんだぜ」

そう言ったレオンの表情が悲しげだったのをスウィニーは背を向けて薬品を手に取り見ないふりをした。重症なのは心か、と胸中で嘆くスウィニーが古すぎる箱型の装置に手を置いて薬品を中へと流し込む。

「スウィニーさ…俺はどうしたらいいと思う？」

「レオンらしくないね。どうってのは？」

「真実を全て言うのか黙っているのか」

「言わない方がいいだろうね。精神が不安定な時に召喚が起きて暴走でもしたらこの船くらいなら数秒で沈む」

「そんな力があるって話を聞いてもわからないぜ。俺には少し歩いただけで疲れる運動不足のお姫様だ。何にでも名前をつけて可愛がる。そのわりに話しかけられるとどうしていいかわからなくて困りやがる」

「レオンはたくさん知っているんだ。船の中には怖がる人もいるだらうね。僕だって正直怖いよ」

「いいやつなんだ」

「それを知っているのもレオンだけさ。君がみんなにフランのことを教えてあげたらいい。知ることが大切なんだよ」

「知ることか…俺はフランの何を知っているんだろうな」

と溢したレオンへスウィニーが柔和な笑みを浮かべて作業へと戻った。古い装置がガタガタと揺れて容器内の液体を揺らした。いつもはうるさくてかなわないと思うが今はその激しい音に助けられる。視界の隅で青い光の粒子が見えたことで振り返るレオン。いつの間にか視界を遮るようにフェリアが立っていて宙を滑るようにフランの横顔へ張り付いた。

「見えるか？今、フランの頬に触れているぜ」

「見えるね。脳が起きてから目が開けるまで数十秒かかるから今目を開けると意識と繋がっていると考えてもいいのかも」

「開けたか…」

レオンは立ち上がり頭を振って状況を把握しようとするフランの顔の前へと座る。フェリアはくるくると回ってレオンの肩へちょこんと座って首へ寄りかかる。

「おはよう…ごきます？」

「ハハハ。まだ夜だよ。疲れが溜まったんだろうな」

「はい。橋を歩いている途中からあまり憶えてません」

「ぼんやりとしていたからな。またいつか来ればいいんだ。今はゆっくりと休めばいい」

聞かれるのが怖くて早く寝かせようと邪険に扱ってしまう。フランの反応が怖くてレオンは思わず目を背けてフェリアを見てしまう。首を傾げるフェリアに沈黙を託すには無理があった。半ば諦めたようにフランへ振り返る。

「…はい。少し眠たいので寝ます。次…朝…目が覚めたら話をしましょうね」

「ああ。たくさん話をしよう。これからはしばらく一緒にいられるんだから時間はある」

「はい」

「おやすみ」

「おやすみなさい」

そう言つと肩にあつた暖かな感触と共にフランの表情が消えた。眠りに落ちるのも早くて目を疑うほどだった。

「寝ぼけていたのかもね」

「良かったって言つていいのかな？俺はもっとフランと一緒にいたいと思つているんだぜ」

「一緒にいられるさ。悩んでいても仕方ない。今日はもう遅いからレオンも眠るといい」

「ああ。そうするぜ。フランを頼むよ」

レオンは立ち上がり医務室を出ようと扉に手をかける。その近くにあるベッドで眠るフランの様子が気になつて立ち止まったが視界の隅にスウィニーが見えて扉を開けて通路へと身体を押しこんだ。

クーパールランド

アソイヤ火山。ふもとの街【クーパールランド】

マグマが岩肌を削り作った自然の滑走路にシーアテイルを停泊させた。そのすぐ脇に街があつて炭坑夫がシャベルを掘り返した土の上に適当に刺して酒場へ消えていく姿が一番に目についた。誰もはやれやれと言つた風な表情でメツトを軽く叩いて愚痴を言い合っているざわめきが優しく仄かな灯りで包まれた街にはよく似合つていた。

だがその炭坑の街に似合わない人影もかなり見られた。テントを張つて火山へ続く道を封鎖し始めているノール軍の兵士だ。

「暑いぜ」

「そうですね」

レオンがタラップを降りてすぐにそう言つて火山の方角を見上げて目を細めて嘆いた声に同意するフランはすっかり顔色も良くなつた。魔力を吸う札を縫い付けたハットを被りバルーンパンツにサスペンダーがあつてトップスはフリル襟の白いシャツを着ている。首筋に汗でピツタリと貼りついたネックレスには魔力を吸いこむ符が貼り替えられる長方形の木の板を持ち歩いているせいでフェリアの姿は見えない。

「あの列は何なのでしょう？」

「あれは奉納に行くんだよ。火山に眠る火の精霊に一年の無事を祈るために薪を火山口に投げ入れる伝統があるんだ」

「今日は奉納のお手伝いが仕事なんですか？」

「…兵士の方のお手伝いかな？奉納の儀式が行われる前に火山へ入

「って精霊へ儀式をするってどういう意思を伝えに行くんだ」

軍が封鎖している手前で薪を置いてふもとへ戻り薪を取りに行く女性だけの列を指差してフランは訊ねたのにそう答えた。

慣れてしまえば何も感じなくなる、と言った脚本家のアツポイの言葉が今になって頭のなかで繰り返される。嘘をついた。その事実がレオンの中でくすぶり始める。

先頭で歩く親方とテッドが街の方角へ歩くのでその背後を二人はついて歩いた。

「いつもこんなに兵士の方々がいらっしやるのでしょうか？」

街は妙にざわついているのを感じたようでフランはそう小さな声で訊ねる。普段は炭坑夫しかいない街。観光する場所でもなければ栄えている様子もなく、ひっそりと佇むという言葉が似合う街で荒廃した雰囲気がある。

錆びたレールの上をガタガタ揺れながら走るトロツコに乗せられた鉱物が落ちないように覆いかぶさる農夫達がレオン達一行を見て何かを話している姿が頭上を通過していった。

「普段は寂れた街さ。あんまり兵士のことは見ない方がいいぜ」

「え…？どうしてですか？」

「忘れたのか？フランはエレン領のお姫様なんだぜ」

「あ…」

「だからと言ってどうなるってわけじゃないが慎重に行動しようぜ。バレたら大変なことになるかもしれないしな」

レオンがそう言うとハットを目深にかぶりなおすフランがきよるきよると周りを覗くのが余計に目立つが兵士と話をされるのも困るので放っておこう。何より変な動物みたいで面白いつてもある。

「大丈夫さ。そんなに構えなくても親方に目が行くから俺達はほとんど目に入らないさ」

と先頭を歩く巨大な後ろ姿を指差して言つとフランは帽子から手を離して口を結んだまま大きくうなずいた。

「だが何かあつても困るから街の中にいる間は俺から離れるなよ」

「はい。ありがとうございます」

「礼は辞めてくれよ。俺がやりたくてやっているんだからさ」

「…はい。すみません」

すいませんつてのもな、と思いながら汗でベツトリとする頬を掻いて階段を登り続けるレオンはフランの体調にも気を配りながら歩調を整えている。そのせいでかなり親方との距離が開いた。

半ばを歩く二人に対して親方とテッドはもう階段を登り終えて街の入口にいる兵士と話を始めている姿が見えた。

「大丈夫か？疲れたら休んでもいいんだ」

「いいえ。大丈夫…このくらいでッ」

振り返りフランを待とうとしたレオンを追いぬいて階段を駆けあがるフランの背中を不安げに見送る視線がフランの肩越しに見えたテッドと合った。

テッドは未だにフランが船にいることを快く思っていないらしくレオンから視線を離すとすぐに親方の背中へついて兵士が案内する街の長の館へと踵を返した。

登り切ったフランが肩で息をしながら振り返りレオンの名前を大声で呼ぶと近くにいた全員が場違いな二人を微笑ましい表情で眺めてくる。少しだけ警戒を緩めてくれたのもフランの天性の明るさや

純粹さによるものだと思じてレオンも階段を駆け上る。

「あんまり離れないでくれよ。いきなり走るともたないぜ」

「はあはあ…すいません」

「まあそんなに大きくない街だから見失うってことは無さそうだからゆっくり歩こう」

「…はい」

フランが息を整えるまで待っていたレオンはしばらくやることもないので街を眺めていることにした。

そこら中にロープウェイの紐が垂らされており頭上からは滑車の音がうるさく降り注いでくる。小さなバケツにこんもりと盛られた土や鉱物が不安定に揺れながら穴から穴へ移動していた。

もちろん滑走路に停泊しているシーアテイルの頭上にもすでにバケツは通過していて土が少しずつ甲板へ落ちているのが見えた。掃除の番は大変だな、誰だっけ？と考えているとフランはもう大丈夫です、と胸を押さえて答えた。

「じゃあ行こうか」

街はちぐはぐで統一感のない外観だった。建物の大きさもバラバラで足りない部分を補強している板のせいで幅も違い、路地にはみ出している建物もある。

ぎゅうぎゅうに押し寄せられた街の隙間をぬうように続く路地を歩いていると足の裏が痛くなってくる。舗装されていないむき出しの岩肌の所々が尖っていて間違えて踏んでしまうと顔をしかめてしまふ。

「こんな場所に住むと大変ですね」

「元々住もうと思っただけで街が出来たんじゃなくて炭坑を掘っている簡

易の宿を作ったのが街の始まりだったんだ」

「少しずつ大きくなって今では立派な街になった。そう思うとちぐはぐな光景も可愛く見えますね」

「可愛く…か？よくわからないが好きになってくれたら話したかいがあったもんだ」

疲れもあるが地熱も手伝って暑すぎる空気はフランの口数を減らした。

その顔色を確認しながら歩調を緩めて歩み続けるレオン達がようやく親方の後ろ姿を見つけた。

屈強な兵士に囲まれていてもその存在感は異常なものだった。親方の前で話を聞く司令クラスの兵士も土地の権利所有者である男も決して小柄ではない。

「ようやく来たか。話をついた。お前らは案内人と共に山へ登れ」

「ん？親方は来ないのか？」

「ああ。テッドとお前に任せる」

「何かあったのか？」

「決定は以上だ。後はこの兵士について行け」

親方が指差した兵士はエコーと名乗り、以後は自分が案内しますと言って敬礼をする。若い兵士で空回りしている空気を全身に漂わせている。

テッドはレオンとフランの名前だけを紹介して山へ登るルートを確認するために話を始めた。親方は土地の所有者と司令と背後に館の中へとそそくさと入っていく。

「まあ水の都市でもそうだったがこういう交渉ごとには向かないから俺らはどっかへ行って待とうか？」

「あ、それでは案内をいたしましょう。立ち話も何ですから宿へ入

り案内人とも合流致しましょう」

「ん？案内をしてくれるのはあんたじゃないのか？」

「いいえ。私は伝達役と護衛を兼任しておりますが案内出来るほどの経験はございません」

バカがつくほど正直に実践の浅さを露呈するエコーはサイズが合っていないヘルメットを押さえながら歩き始めた後を三人は追いかける。

ぎこちない歩き方に口数の多さから新人だとわかる。親方の用事つてのがメインでこつちがどうでもいい用事に見えるな、と關心しながら歩くこと五分して宿へ着いた。

宿の入口をくぐると閑散とした室内に乱雑にマットが敷かれているだけの簡易宿だった。荷物が端に積まれてあり、砂ほこりまみれの武器までもが転がっていた。

「到着したばかりですから」

中を見て不用心だと呟いたテッドへそう返すエコーが不機嫌な声色で答える。

「その案内人つてのは何処にいるんだ？」

「ここへ来られると思います。それまでしばらくお待ちください」

エコーは矢継ぎ早に訊ねられる言葉に苛立っていたのを隠しきれずに早口でまくしたてるようにそう言っただけで足早に何処かへ消えてしまった。

「暑さに慣れていないんだろ？…都会の兵士が引つ張りだされたか？」

「ああ。ここは暑い。レオン達も今の内に休んでおけよ」

「お言葉に甘えさせてもらっぜ。これで冷房でもあれば最高なんだケド」

「贅沢を言っな。だがこれはある」

テッドはそう言ってワンシヨルダのバックから小さな青い札を取り出してレオンへ投げてよこした。アイストーンという微力な冷気を発し続ける石を縫い付けてある札だった。

「へへへ。ありがたい。フランのもあるぜ」

「はい。あの…ありがとうございます」

フランは両手で札を受け取りテッドへ礼を言ったがテッドは薄く頭を下げただけのそっけない対応だった。フランは言葉を詰まらせてすいません、と小声で言った。

「テッドはいつもこうさ。クールを見せるとモテるんだぜ」

「冗談っぽく言ってフランを元気づけようとしたがフランは伏せた瞳をあげることも笑顔を見せることも無かった。テッドも背を向けて腕を組んで案内人を待ち始める。

顔を見るのが辛いたって母親とフランは違うんだぜ、と言いたかったが辞めておいた。ミレイに言われた言葉もあつて沈黙を選んだレオンは勝手に寝ころんでふて寝をしようと思った。

居心地の悪い空気だった中、案内人が登場してテッドと話を始める声が聞こえるとレオンの隣に誰かが座った。薄目を開けなくともフランだとわかった。

「…嫌われているのでしょうか？」

「誰にだってあの態度さ」

「船内でもあまり歓迎されてもらえない視線は感じます」

「誰だって人見知りくらいするさ」

レオンは目を閉じたまま受け答えをする。ノアールからの依頼を賛成していない船員もテッドを含めてかなりの数がいる。だが親方の指示通り、フランには事情を話すことも出来ないので無視をするしか出来ないでいる人も多い。

知らない隣人がどれほど怖いのかを想像したことはないがフランを知れば賛成してくれると信じている。今はただ時間が足りなくてぎくしゃくしているだけだろうとスウィニーは言うが本当だろうかと考えてしまう。

親方に拾われなければ多くの人種は見世物にされるか、迫害されるかだった。そういう事実があつて居場所を失う恐怖は伝染していく。フランの力が暴走すれば、フランを追いかけるエレンに見つかれば、ノアールに引きとつてもらえ、おろせばいい、そんな声がレオンにも聞こえてくる。

「あー…暑くて眠れないぜ」

上半身を起こして背筋を伸ばすレオンは横で悲しげな表情を浮かべるフランに同意を求めるが上の空。視線の先には案内人とテッドが地図を手にルートと持っていく道具を確認し合っている。

「これから火山へ何をしに行くのでしょうか？兵士の方とは別れてしまったようですが…」

フランはただ疑問を口にしたただけだろうがレオンにとっては難しい質問だった。何と答えればよいのだろうか、と首を鳴らして考える。

フェリアのように精霊を回収する？あの時はフランから声が聞こえたと言って走ってくれたからついていけたが今回は自らそこへ向

かい精霊に会うこととなる。

理由を聞かれて本当の話をするべきなのか。だがそんな話をするには母親だと思っっている人が敵で本当の母親とも会えないって話もしなければならなくなる。どう受け取るか何を感じるかは見当もつかないが真実を話すと何が起こるかわからない。

かと言っつて嘘をつき続けることも出来ないだろう、とフランの表情を横目に見ながら心に留めておく。

「火山口へ行くんだ。そこで精霊に会って話をすると思う」

「…と思う？」

「話すのはフランだ。神殿のごたごたの後にノアールの人から依頼されて精霊と話してくれっつて…えっつと…説明しにくいぜ。とにかく兵士と共にいると身元がバレるかもしれないしな」

「そう…ですか…」

「エレンにはエレンの話し方もある。発音の仕方もそれぞれ地方独特のモノもあつたりするから会話をしているだけでどこの出身ですか？とかいう話にもなると困るしな」

「はい。困ります」

「そういうことだよ。フランはあんまり気にすることじゃないぜ。魔物もほとんどいないだろうし山を登るだけだ。数は必要ない」

レオンは真実を織り交ぜながら嘘をついた。少しずつ話をしていこう、と心に決めて今はごまかすことを選んだ。

何かあるつと守つてやると言つたすぐにこれだ、と自責の念が執拗に浮かんでくる。レオンは自らの未熟さを恨んでグツと歯を食いしばる。

「…それで問題ない。レオンも用意出来たならすぐに出発するぞ」

テッドがそう言つとレオンへ足元にあつたりユックを投げてよこ

して案内人と共に火山の入口を封鎖しているバリケードへと歩き始めた。

バリケードの傍らで薪を入れた壺を脇に抱えた女性達が正座して何かを待っていた。ノール兵士は完全封鎖を実施しているらしくこの地域に住む人の出入りまで制限をしていた。

その前を四人が通るとバリケードを守っていた重火器を持った兵士が敬礼しバリケードの一部を解放した。案内人も敬礼をしていることから兵士の一人だと知った。

「あの方々は？」

「俺達が精霊との会話を終えるまで待つてくれているんだ。神殿の時のようにパニックにならないようにな」

壺を抱えた女性達の年齢はバラバラで人種も違った。壺の形も色も薪の量も違うが赤色を基調とした布を身体に巻きつけてある衣装だけは同じだった。

密集した一団の先頭にいた老婆がリーダーで兵士に詰め寄って激昂している声も未だに聞こえてくる。

「事情は伏せておいた方がいいだろう？話しても信じられないぜ。ウォーラムの時だって夢やイタズラだって言って中へ入って危険だったからな」

「危険……」

「フランは心配しなくても俺が守ってやるぜ」

「はい……でも話は出来るかもわかりませんしお役に立てるかどうか

も心配です」

「今、あの神殿の時みたいに声は聞こえないのか？何かを感じるとか？」

フランは小さく首を振る。

詳しい話も聞かされていない。精霊を解放すればどうなるとも解放する理由も知らないで全てが親方達の中だけで話は進んでいた。

闇の一族が精霊を回収することが出来るのならずと前にしているはずだ。だが今になって動きだしたのもエレンの王族から命令されたつてのもつじつま合わせに聞こえる。

何が真実で何が起ころうとしているのか、そもそもさらわれたって話も本当なのかも嘘なのかもわからない。執事はどうしてそんなことを知ることが出来たのだろうか、と考えるほどに無口になってしまふレオンはハツとフランの視線に気づいた。

「フェリアは…フェリアの声も聞こえませんがレオンさんは感じますか？フェリアの何かを」

「いや今は何も聞こえないな。俺の頭の寝心地はいいらしいぜ」
「ふふふ。そうだと私も嬉しいです」

魔力を吸いこんでいる札をぶら下げたネックレスの紐が首筋に見える。細くて白い首筋に真っ黒のゴムがぴったりと吸いついていた。意識と連動しているより自然に放出している魔力に反応して精霊は姿を現すというスウィニーの仮説は正しいと思う。札を持っていく時は小さな精霊は姿を現してこない。

精霊の血を引く者と言われていた言葉から思うにノアールの姫と一つのも疑わしい。そもそも精霊の血とは？自然に魔法を発する体質とも関係があるのだろうか？

まただ、レオンは考え込んでしまふ頭を振って笑顔を見せた。

「俺も嬉しくなるぜ。あーマリスフィームみたいに観光都市だったから美味しいものでも食べられるんだけどな」

「食いしん坊ですね」

「フランだって食べたいだろう？」

「はい。実は期待してました」

「ハハハ。正直なのはいいことだぜ。火山でも自然に取れる食べ物はないのかな？聞いてみるか」

話をそらせるレオンは前を歩く案内人に質問をした。

まだ山へ入ったばかりなので遠くに木々が多い茂る部分も見えている。動物の気配もあって果物くらいはありそうだった。

「果物がありますが塩分が含まれておりますので人間が食べるには塩辛すぎますよ」

「そうなのか？残念だな」

「観光地ではありませんからね。お連れの方は疲れましたか？休息にしましょうか？」

「後どのくらいなんだ？あんまり休んで遅くなるのもあれだし」

「距離にすると数キロですが山道ですから二時間近くはかかると思っています。我々でも悪い足場を歩くと疲れる。斜面も急こう配で思ったよりも体力は奪われます」

「ううん…フラン疲れたか？」

レオンは振り返りフランへ訊ねるがフランは大丈夫ですよと微笑み返した。

「ではまだ先を行きましょう。ある程度行けば温度が急激にあがりますからその手前で休憩をはさめば大丈夫でしょう。ですがくれぐれも無理はしないようにしてもらえますか？」

「あ、はい…」

明らかにフランを見て案内人はそう言った。柔らかな物腰とは裏腹に有無を言わせない迫力があつた。

身体を心配しているよりも別の事情があるような口ぶりにレオンは不服だつたが事を荒立てる必要もないとフランの横へと下がつた。全員が厄介な物として見ているような視線を感じてフランはまた目を伏せて歩き始めた。テッドに冷たくされた時と同じような表情に明るく話しかけるレオンの声も届かない自分の殻へと閉じこもっている。

「迷惑をかけていますよね」

「いやそんなことはないぜ。精霊と話を出来るつてもフランだけなんだからフランの体調を気遣うのは当然だ」

「…私、頑張ります。だからもう少しだけ一緒にいてもらえますか？」

「何を言っているんだよ。俺はずっと一緒にいるぜ」

ネガティブな思考を壊せるほどに明るくふるまおうとしているレオンだけが空回りしている現場の空気にテッドは苛立っていたのがその瞳でわかる。

時折、目が合うと瞳の奥で湛えた感情がこの足元を流れるマグマと同じように真つ赤に燃えあがっている。今になって思えばそれがテッドらしくないと思うべきだった。

「ここで休みましょうか？」

案内人がそう言つて岩石を削つて作った椅子に座り足元へ荷物をおろした。荷物から飲み水を出して飲んだりしながら休憩する間もテッドは座らないでいた。

レオンとフランも適当な岩石へ座り、道具から水を取り出して一

息入れた。

「火の精霊ってさ、どんな感じなんだろうな？やっぱり怒れる巨人なのかな？」

「物語のイメージではそう言った巨人がマグマの雨を降らせて街を灰にしたとかいう逸話がありますが火の精霊は深い愛情を持った精霊と言われています」

「深い愛情？」

「人を包みこむ優しさが海ならば人を愛し人を抱き締める強さみたいなのが火なのでしょうか？悪い面ばかりが強調されるので観光地にはならないんですよ」

「そうなのか。悪い面？」

「嫉妬・憎悪・憤怒などのネガティブなイメージが物語で定着してしまつて人が寄りつかなくて普段は静かな一帯ですよ」

案内人は調査団の一員で民俗学や宗教学の権威も持っていると自慢げに話を続けた。

「物語はたくさん知っています。ガレリアと巨人の舞台もここですよね？」

「よくご存じですね。そうあれも巨人が街を滅ぼしたというシーンだけが印象的なのですがあれはマグマの噴火を予期して街から非難させるために巨人は街を壊したんですがね」

「そうだったんですか？私の知っている話と全然違います」

「脚本家は話を捻じ曲げてよりドラマチックに盛り上げようとはかりしているので事実と違う話も多いんですよ」

「へー。知らなかった」

「ハハハ。皆そうですよ。学者の中でも勘違いしている人もいますからですから」

「そうなんです。火の精霊と会えばもっとイメージが変わるかも

しれません。会うのが楽しみになりました」

「そりゃ良かった。何しろ精霊と交信をする時は心の全てが見られてしまうそうですから好意的に接すればそれ以上に愛情を持って接してくれますよ」

案内人は朗らかに笑って物語の話と歴史を織り交せて話した。さきほど見せた鋭い瞳も嘘だったかのように柔らかな表情で接している。

ただそれだけにフランが精霊と話すのは慎重に行うべきものなんだろうとレオンに思わせた。命に関わるようなことが起こる可能性もありあの時と同じようにトランスで戦うことになることも覚悟しておこう。

テッドがいるのもトランスと関係あるのだろうか？トランスが暴走して止める役目をテッドが任されたと考えれば自然に納得出来る。いつもテッドはレオンのお守役をしていた。

任務が失敗しそうになってフォローしてくれたのもいつもテッドだ。自分の感情で突っ走るレオンを冷静に止めてくれるのはいつだってテッドだった。

「そろそろ行こう。日が暮れるまでには用事を済ませたい」

テッドが舞台の話で盛り上がる二人へと行って再び、山に登るところとなった。

山の景色がガラリと変わった。足元にあったわずかにあった木の枝も消えて熱気で表面が泥になる足場が傾斜を流れていくのが目に

見える。

尖った岩石の形も丸みを帯びたものとなっており、遠くでは穴が確認できるようになった。その穴の奥には朱色に波打つマグマが衝突し合っていた。

案内人も口数が極端に減り、手袋で汗を拭いながら何度も振り返りフランの顔色を確認していた。

「どのくらい登ったんだ？急激に気温があがって別世界だぜ」

レオンは振り返る案内人に叫ぶ。マグマが山の内側を溶かす音や焦がす音、水蒸気があがる音や耳の中に溜まる汗のせいで声が聞こえにくく感じる。

「まだ半分ほどです」

「まだ…半分もあるのかッ？思ったよりも辛いぜ」

「この上に行くくと地表の隙間から煙も出るので視界も悪くなります」

「そりゃ大変だぜ。このくらい離れていても大丈夫なのか？足音も聞こえないぜ」

「もうすぐ一本道になりますから大丈夫です。姿が見えなくとも音が聞こえなくとも火山口へ続く道はそこだけ」

案内人も叫んで答えるが体力を消費するだけです、と言って会話を辞めた。

レオン自身も熱気に包まれたせいで全身が重たい。標高の高さも手伝って酸素も薄く体力を奪っていく。

「大丈夫か？」

「…はあはあ…はい。大丈夫 大丈夫です」

「無理をするなよって言っても休むのも無理か」

「…ほ…ほ…はい。大丈夫です」

「ほら、これも持って首筋を冷やせば少しは楽になるぜ」

テッドにもらったアイスストーンをフランに手渡したがそれさえも受け取れないほどに疲弊していた。レオンは足並みを落として背後からフランの首筋にアイスストーンを当てながら歩いた。

「あの…すいません…」

「俺は好きでやっているんだ。謝る必要なんて無いぜ。どうしても謝りたくなったらありがとって言うてくれよ。その方が嬉しい」
「…」

こくん、とうなずくフランは言葉を出す力もない。

それからもずいぶん山を登り続けた気がする。白い煙が足元にまとわりつくようになって、とまっているとすぐに煙は視界を遮った。

身体に付着する水蒸気の量も煙の量と共に増えて身体を重くする。フランの首筋に当たったアイスストーンも効力を失ってぬるい石になったのが掌の感触で察した。

足元に見える誰かがつけた目印を踏んで移動しなければならぬほどの煙に抱かれて傍らにいるフランの姿も見えなくなりそうだった。

「手を握るぜ。何かあれば握り返してくれ。返事は全て握り返してくれたらいい」

レオンはそう言ってフランの手を握った。湿った手同士でぬるりと滑るがしっかりと握った。

火山口を降りると言うことは水蒸気が流れて出来た狭い道を縁にそって歩いているだけになる。一歩踏み外せば火の海へ落ちることとなる。そう思えばしっかりと握る手に力が入る。

「ッ」

その景色が一変し、真っ赤に染まった。

煙は頭上にたむろしていて視界は鮮明になっていた。足元の汚い煤けた岩が自然の段差となつて火山口へと続いている。大部分がマグマで足を踏み出す度に小さな石が転がって岩肌を滑り落ち、ジュツと音を立ててマグマに消滅する。

螺旋状に続く一本道で段々と火山内部へと下って行っていた。

熱気はからつとしたモノとなつて体感温度はグンと下がり、息がしやすくなつた。身体も軽くなり意識も鮮明に近づいてくる。

「祭壇が見える」

「はい。あれは…どうしてこんな場所にあるのでしょうか？」

「作つたんだとしてもどうやって作つたんだらうな」

ずっと下り続けていると宙に浮かぶブロック群が見えた。正方形に整えられた深紅のブロックと黒のブロックが交互にあつてその中央には水の神殿と似た祭壇があつた。

「支柱も無い。どうやって浮いているんだ？」

「不思議ですね」

近づいてくるほどにそのシルエツトが鮮明になつてくる。左右から伸びた支柱に支えられて浮かんでいるように見えると思われていたブロック群は文字通り浮かんでいた。

マグマと水平に浮かぶ祭壇。側面の壁もまばらにあつて元々全部を囲っていたが熱で溶けてしまったように見えたのは側面のブロックの角が丸くなつていたからだつた。重力に垂れるように、獣の尾のように滑らかなカーブを描いて伸びたブロックも複数ある。

「声は聞こえるか？」

「いいえ」

「もつと近づいてみるか。聞こえたら教えてくれよ。聞こえなくてもフランのせいでもないから気にするなよ」

「…はい。すいま あの…ありがとうございます」

「いいんだ。この時に礼を言うのは違うかなって思うぜ。でも何度感謝されても嫌な気持ちにはならないぜ」

レオンは柔らかな笑みを浮かべてフランの言葉を受け止める。

案内人とテッドは先にブロック群へ立って祭壇を調べ始めている姿を横目にフランの歩調に合わせて歩いていったレオンもようやく祭壇へと足を乗せた。

その時、ガタガタとブロックが揺れ始めた。

「何があったッ?!」

レオンが戻ろうとするが背後にあった側面のブロックが帰り道を塞ぐように落ちた。

まだ揺れ続けているブロック。レオンは腰に差した剣に手を置いて周囲を見渡して警戒をする。

「みゅー」

頭の横で声が聞こえた。フェリアの声。

レオンが振り返るとフランの首から下げた札が千切れて足元に落ちていたのが見えた。フランは頭を抱えて膝から崩れた。

「フラン何か…何か聞こえたのかッ!!」

「辞めて…辞めてー!!」

フランは叫んだ。声の限り叫ぶ悲痛の声色にレオンの足も止ま
た。

二つのクーパー

「レオンさん、後ろッ!!」

振り返る前に熱気が背中へ迫ってくる感覚があったが目の前で叫ぶフランに気を取られて反応が遅れた。

「クッ」

レオンは右手を顔の横に当てて熱球をもろに受け止めてしまった。衝撃で身体ごと吹き飛んで前のめりに地面に突っ伏す。

声の主は案内人だった。案内人は簡易に作れる盾（本来はマグマが飛び散った時に身を守る登山用の盾）を構えながら身体を丸めてレオンとフランの方へ近づいてくる。

その背中越しに見えるテッドの身体が燃えている。明るい炎の色が身体の表面を包み込みもがき苦しむシルエットがよれよれと動く度に熱球は乱反射し始めていた。

「何があつたッ?!」

「わかりません…私が気付いた時にはあのように炎に抱かれておりました」

「助けないと」

「ダメです!!」

盾を構えてレオンとフランを守るように身構える案内人を押しつけてテッドの元へ行こうとしたレオンの衣服を引っ張り盾の効力がある範囲に引き戻される。

「あれは…精霊の火。あなた達は精霊を呼びだす為に来たのでしょ

うツ?!」

「だとしてもツ。あれは何だ?水の精霊を呼んだ時はあんな風に苦しんでいなかった」

レオンは案内人の肩辺りで展開する半透明の盾越しにもう一度確認し、自分の記憶と照らし合わすが全く違って見えた。あれはトランスというより肉体を焼き尽くされるほどの勢いと膨大な悪意を感じる。

視線を水平に動かして隣にいるフランを見る。辞めて、と叫び続けている全身の表面に薄い真つ赤なオーラが現れ始めた。

「大丈夫か?」

「辞めて!!お願いだから辞めて!!」

「何を言っているんだ?フランツ!!しっかりしてくれ」

「いやー!!」

錯乱するフランの肩を掴んで落ち着かせようとした手が何かに弾かれる。指先にしびれが残っているがもう一度フランへ触れようとした。

「大丈夫だ。俺が守ってやる。怖がることなんて何も無いんだ」

「辞めて…クーパー…私達は二つで…」

「何?聞こえないぜ」

「辞めて…クーパー…お願いだから」

「クーパー…?火の精霊の名前か?頼む。俺からも頼むぜ!!」

レオンも共に叫んだ。

だが、フランは怯えて震える。テッドは苦しみもがいている。レオンはただ何も出来ずに手をこまねいている。

「レビー…貴様はなぜ俺を捨てた…」

テッドが漏らした言葉さえも焼き尽くす炎は勢いを増し続けて、いつしか巨大な火柱になっていた。ブロック群ごと揺らすほどの力があり、足元に広がる火の海も呼応するように波を高くしていた。

「火の精霊は双子だという話を聞いている。あれは…片方。嫉妬や憎悪にとりつかれたクーパーか」

「嫉妬や憎悪だってッ」

「彼自身も強い憎悪を持っていたのだろう。それに反応したのか、厄介なことになった。もう片方の精霊が出てきてくれたら良かったんだが」

「もう片方…精霊は二人？だったらフランが聞いている声はもう片方の声…なのか？」

「おそらくそうだろうね。辞めてっていう言葉もそう受け取れば自然だ」

テッドを包む炎は色を濃くし、深紅に近い赤となる。やがてシルエットも炎に貼りついた影になり、声も聞こえなくなった。

声が聞こえなくなるとフランも次第に落ち着きを取り戻し始める。丸めた背中、必死に足りない酸素を吸うような呼吸。頭にやっていた両手を地面へついたが自分を支える力も残っていないく頬から倒れる。

レオンはフランを抱き起こしそうと手を伸ばすが触れられない。身体の表面にあった赤いオーラがよりくつきりと見えてそれが阻んでいる。オーラは球体状に膨らみ、フランを包む甲羅になった。

「レオンさん…あれは精霊…でしょうか？」

案内人の声で振り返ると火柱は火山口の隙間に敷き詰められた白

い煙を突き破って消えて、残ったのは全身を真っ赤に変えたテッドの姿だった。水の神殿でトランスした自分の姿とそっくりなテッドがしゅうしゅう、と音を立てて呼吸していた。

魔物のそれに似ている姿に絶句する案内人が盾を片手にレオンの背後へ逃げ隠れた。レオンはテッドから目をそらさずに立ち上がる。テッドは手を掲げると全身の赤い光がそこへ集結してくる。光は長槍となり、軽く横へ薙ぐだけで熱風が襲ってくる。

「テッド…」

「退け」

「テッドじゃないのか…」

「退かないのならばお前も殺すッ！…」

「辞めてくれッ！…どうしたんだッ」

テッドは低い体勢のまま、地面すれすれを滑空して槍を突き上げる。槍先がレオンの頬をかすめて前髪の一部を焼いた。

「…辞めて」

「クッ」

レオンの背後から二本の炎の角がテッドへと伸びたのを槍で器用に捌きながら後方へ押し戻された。

フランが立ち上がる気配があつて視界の隅に見えていた角がキューっという風船を擦るような音を立ててフランを包む甲羅の中へと戻っていく。

「フラン…？いやクーパーか？」

「はい。私の名前はクーパー。火の精霊です」

「セイラムの時より話が出来そうだ」

「時間はあまりありません…あのリアムにいるのは私のもう片方。」

私達は二つで一つ」

「二つで一つ…?」

レオンがそう訊ね返すと返事は来なかった。代わりに全身が真っ赤なオーラで包み込まれていた。あの時と同じだ。

湧き上がる力の奔流に身を委ねていると自然にトランス状態へとなることが出来た。全身を光が包んで、手には赤色の剣がある。

「嫉妬、憎悪を持つリアムの心に強い反応をしたのでしょうか」

「テッドが…」

「レビー。その名前が彼の心を支配している」

「レビー…俺達の母親の名前だ。俺達を捨てた母親の名前…」

頭の中で響く誰かの声にそう答えるとレオンは途端に無力を感じる。自分は守れなかった。自分は幼くて何もしてあげられなかった。テッドは怒っていたんだ、と思うと今までの母親への嘆きが頭に浮かぶ。

深い憎悪、捨てられた憎しみが塊となって心の隅で転がっていたのだろうか。目の前のテッドは怒りに身を委ねている。深い痛みだ。深い憎しみだ。鮮明に見える赤色が心の痛みだと知った。

顔には出さないテッドの内面にくすぶり続けていた火がこんなにも大きいなんて思わなかった。

「レビー…母か…」

レオンは少ししかない記憶の糸を手繰り寄せた。

リールサナと呼ばれる砂漠の手前にある旅商人や旅人が砂漠を超えるために一泊過ごすために作られた街に兄弟はいた。街の大半の人間は旅人相手の商売をしていて母のレビーも例外では無かった。夜の17時から24時まで四公演を繰り返す毎日で昼間も練習に時間を費やしてロクに話した記憶もない。そんな街の子供達の大半は街外れにある教会や孤児院に預けられて母の帰りを待つ日々。迎えが来ない日も少なくはない。

「また来ていたよ」

近くにある施設の研究者である犬族の医者が気絶したテッドを抱きかかえて教会の門扉を叩くのも見慣れた光景になりつつある。

テッドは毎日のように街へ行き、劇場へ足を運んでいる。レオンは呼ばれたことも行くことと思っただけのこともない。待っている、と言われたのだから待っているのが当然だと同じ街の子供に言われていたからだ。

寂しいか、と聞かれれば複雑な気持ちだった。ここには神父さんもシスターも多くいて同年代の子供もたくさんいた。

「…これはまたご迷惑をかけました」

「いいえ。母親に会いたいのでしよう。お気持ちは察します」

神父が困り果てた表情でテッドを受け取ると犬族の研究者は神父の膝もとにいたレオンへ視線を移した。

「この子もリアム…ということは兄弟ですか？」

「はい。父親は違いますが母親は同じ兄弟です。まるで違った性格をしていますよ」

「優しい目をしている」

「この子は優しい。兄もまた優しいですがこの子は特別施設の子供たちにも人気がありますよ」

「リアムは特別な血を持っている。かつてのレッドと同じようにこの街を守る力がある」

レッドとはこの国境線上にある街が戦乱に巻き込まれた時に孤軍奮闘し戦火を退けた英雄の名前だ。昔話の類で何度も聞かされた。レッドに似ている、というのも大人が良く使う褒める言葉の一つだったことを憶えている。

「それでは私は」

去ろうとした犬族の研究者の裾を引っ張る小さな手が神父の腕の中から伸びている。

「この子は母を思いすぎています。依存しているという方が近い」

「五歳に満たない子供が母親の傍にいたいと思わない方がおかしい。だが街には荒くれ者や流れモノも少なくはない」

「危険なのも承知しております。学業の一環で教えてもおりますが…まだ若すぎる。学ぶには時間が必要です」

「ええ。我々も出来る限りのお手伝いは致しますよ」

「申し訳ありません。甘えさせていただくしか出来ません。何しろ人手が足りないのです」

教会の中には街中の子供でひしめき合っている。うるさくてドタドタと暴れ回る子供の声がまた背後から聞こえている。

「いいえ。お互い様ですよ。では」

犬族の研究者は小さな手の指を一つずつ離して街の方角へ続くな

だらかな斜面へと歩き始めた。その向かう先には灯りがともり始めてここからでも賑わいを感じられた。

「俺はあんまり覚えていないぜ。断片的な表情や仕草やニオイしか覚えていない」

クーパーの声にノイズが入ってもう会話が出来なくなった。ふいに思い出した懐かしい光景にも涙一つこぼす気にはなれない。

「何だつていまさらそんなことで憎しむんだ？もう過ぎたことだけ。まあ俺だって色々思うことはある」

レオンは顔を半分だけ振りからせてフランを見る。全身を覆う赤いオーラが波打ってそれ自体が生物みたいだった。

焦点が合っていない瞳孔が開いた瞳の中は互いに見合わせて真ん中にあるレオンは空気がみただった。精霊同士も強い感情があるのを心の奥で知っている。

憎しみを持ったテッドのクーパーとは違った感情。暖かくて相手のことを深く愛している感情で満たされる心が全身に力を注ぎ続けてくれる。

「母親なんてロクな人間はいないか…」

ふいに過る言葉。フランの母親が見捨てたという話をしていた時にテッドには予兆があった。声を荒げることなんて珍しいと思っていた。

いまさらっていうのもフランの顔を見たから思い出したのか。フランも同じ境遇なのにさえ怒りを感じているのか。

「スウィニーも神父さんもさ…優しいのはテッドの方だぜ。俺はただ何も考えていなかっただけさ」

レオンはそうこぼして迫りくるテッドの長槍の猛攻を正面から受け止めた。背後にいるフランを守るために戦い続ける。だがテッドも守りたい。それがわがままなのか？何かを選べば何かを捨てなきゃならないのか？

「違うッ！！目を覚ましてくれ」

「うるさいッ！！退けッ」

「退かないぜ。俺は守るって約束したんだ。たとえこの身をその炎で焦がしてもここを退かないぜ」

レオンは槍を弾き返したが追撃はしなかった。テッドの身体を覆う赤い色がドンドン、と黒ずんで深紅に近い色までなってきた。

「退かないなら全てを壊してやる」

「どうしちまつたんだ…テッド…」

「怒りをくえ。俺が味わった苦痛をお前は知れ！！」

「辞めてくれッ」

長槍を掌の中にくるりと回して先端を足元の黒いブロックへ突き刺した。先端がブロックを突き抜けてからもテッドは全身の力を込めて奥へと押し込み続ける。

「何をしているんだ？クーパー！！教えてくれ」

レオンの声が虚しく響いた。

その時、静寂を破るありったけの魔力を込めた一筋の矢がレオンの背後から槍を突き立てるテッドへと伸びた。

「辞める!!」

「ですが…今がチャンスです」

「チャンスだつて？あれは仲間だ」

「私にはそう見えません」

キツパリと言ったのは案内人だった。構えたボーガンをおろして立ち上がりテッドの様子を確認する。

矢はテッドの肩へと突きぬけて背後のブロックに当たって折れた。テッドは顔を苦痛に歪ませて長槍から手を離れた。槍はすうーと落ちて足元に広がるマグマへと落下する。

「ッ!!」

槍が火の海へ落ちた途端に複数の火柱があがり、ブロック群の高さも遙かに越えて白い煙を突き破った。

「噴火させる気だったのかッ」

「…どうしてだ？テッド…辞めてくれよ」

「やはりこれは危険すぎる。レオンさんも手伝ってあれを倒しまし
よう」

「倒す？倒すつたつて…あれは…あれは…あいつはテッドだ」

悔しさを吐きだすように咆哮し、また赤色の光を掌に集め始めるテッドが獣のそれに似ている。いつものクールな表情は消えて怒りに身を任せているのが一目でわかる。心で感じる。震えているのは心の中にいるクーパーだ。きつと泣いている。

レオンの頬に暖かな涙が流れた。憑依された身体を使ってクーパ
ーが泣いている。

「どつすりゃいいんだよ」

身体を抱く炎の色も黒ずみながら肥大していくのを見て案内人は
慌ててもう一つの矢をボーガンに装填し始めていた。

追憶のテッド

テッドの回想

教会のお手洗いは外の離れにあった。幼児を寝かせるシートの中
央に折り目を付けておくと一定の時間で背中がかゆくなり泣き始
める。そのドタバタの最中にトイレへ行くと行って街へいつていた。

方法はいくつもあった。たとえば近くにある森から迷いこんで
たうり坊を畑がある囲いの中へ置いて窓の外を眺めていると幼児が
興味を示してちよつとした騒ぎになる。その騒ぎの中、礼拝堂の
口から堂々と抜けることが出来た。

「靴を履いてくれば良かった」

大きな車輪付きの馬車が通らないので小石は潰されなくて残つて
いる。舗装なんてされる費用もなくボランティアで草が整えられて
いるだけのあぜ道をひた走るテッド。子供の足でも十分ほどで街の
入口付近へと降りれる。

小高い丘の上にある教会。砂漠の興業都市との距離感が絶妙な人
の心を表している。

入口に掲げられた電飾付きの看板の足元に身を寄せて街の中を覗
くテッドの視線の先には劇場【マドラーデ】があった。昼間に見る
と間抜けな外観の分厚い布で覆われて太い木々が支柱の代わりに使
われてあるだけの劇場に人が吸い込まれる。

昼間に入る人間は劇場の関係者が多いとスウィニーが言っていた。
犬族の研究者は今日も夕方になるとふらつとやってきてテーブルの
隅でミルク割のスコッチを飲むのだろう。

「見えない…か」

テッドは入口からは街の中へ入らずに柵に囲まれた外周にそって歩いた。劇場の数だけでも十以上はある。宿にカジノに武器も材料も砂漠を超えるために必要な道具は何でも揃えることが出来た。柵の内側でわずかな活気があるのはそのせいだ。

大半の人はその一つ前の街で全てを揃えて夜に砂漠を超える前に仮眠をとるために利用するがまれに数日間もうろろしている人もいて、その人は名前が覚えられるほどに入れ替わりが激しい街だった。

円形に広がる街の裏口、砂漠に近い出口の脇に小さな穴があった。テッドがほふく前進をしても背中を擦るほどに小さな穴を通り抜けた場所で折り返し今度は柵の内側を来た道を戻った。

「もう日が上がりきったか…」

教会の人が気づいて騒ぎ始める頃だ。最近じゃ諦めて探すこともしていないと思うが、とつかの間の感傷に浸りながら太陽を見上げて先を急いだ。劇場はどれも同じ外観をしているが毎日のように見ている母親がいる劇場だけは一目でわかる。

「…それは…いい値段するが…だが…」

「運搬に費用が…何しろノールからの代物で…エレンからだ税金が…」

「仕方ないにしろ…ううん」

テッドは声が聞こえて足を止めた。

露店の武器屋と体躯が二回り大きい男の話声。その呼吸に合わせてそつと足音を立てて移動する。見つかれば騒ぎになることもある。まるで子供の獣を見つけたみたいに目を丸くしている姿は何度も見た。

代物を手にとって鞘から剣を抜いた時に一気に走り抜ける。店と店の間からこちらを見ようとした横顔が店主の言葉に振り返った。少しだけ走り材料屋の裏にある樽と樽の間にすっぽりと身を挟んで呼吸と胸の鼓動を整える。口を押さえて思いつきり息を吸うとだいぶ楽になる。口元から手を離して空を仰ぎつかの間の休息を得る。

「もう少しで会える」

念のため、左右の人影を確認してから樽から身を剥がした。立ち上がり脇を見ると柵がさつきよりも高く見えた。

テッドは疲れを自覚しながらも劇場へと走った。

数分。劇場裏のテントの隅をしっかりと握って到着の味をかみしめる。時間によって太陽にさらされる部分なのでまだ温かさが残っていた。

耳を当て中から洩れる声を聞いた。舞台を踏む足の音と手拍子が続いている。

「…」

それだけで嬉しかった。テッドは涙を堪えながらその音にただ身を寄せた。

テッドは水平に手を払って案内人が放った一筋の魔法矢の軌道を変える。矢の軌道は弓なりに湾曲し斜め上にあつた真紅と黒のブロツクの隙間を抜けて火山の壁へぶつかり二つに折れて火の海へと沈んだ。

「辞めろ!!」

「ですがッさっきの火柱を見たでしょう?」

「ッ」

「溶岩の雨が街へ降るのは絶対に阻止しないと」

また矢を装填し始めようと屈んだ案内人にテッドが攻撃を仕掛けようと駆けだす。

「辞めてくれ」

「退ける」

間に入り槍を受け止めるレオンがそう叫んだがテッドは冷静な口調で返した。

「テッドは…テッドに怒りは似合わないぜ。誰かに操られている姿も様になってねえぜ」

「…」

「目を覚ましてくれよ。俺は…俺はッ」

「退ける」

一瞬のすきをついて剣を弾くテッドが開いたスペースをくぐり抜けて案内人へと槍を一闪させる。反応が遅れた案内人。盾で直撃だけは避けれたが盾は破損し出力が低下する。

仰け反り尻をつく案内人の頭上から槍を縦に構えたテッドが追撃する。

「ッ」

その槍の側面から炎が流れてくる。手元から槍を奪い去って壁の

奥へとねじ込んだ。勢いを失った炎と共に火の海へ落ちる槍が小さな火柱を起こしたのが足元に見える。

炎を放ったのはフランの肩から生える角のような何か。

「クーパー：お願いだから辞めて…そうじゃないと私は」

「またお前だけで独占しようとするのか？」

「違う。違うの」

「お前は私だと言うが、私はお前ではない。断じて違う!!」

テッドではなく中にいるクーパーが言ったように聞こえる。フランの中にいるクーパーが違うと返せば倍の声で違うと言いつ返した。

言い合いが続くほどレオンのトランスの力が弱まってくる。力が抜けて手に持った剣の輪郭もぼんやりとし始めていた。その代わりにフランの周囲を囲う炎は大きく膨らんでいく。

ひゃーっ、とその隙に逃げる案内人にも目を向けずににらみ合う両者が作り出す空気に火の海も押されて静かに波打つ。

「あなたはクーパー：私もクーパー。二人は一つ（パーニャ）二人で一人」

「憎しみ、嫌悪、嫉み。押しつけたのはお前だ」

「違う」

「そしてお前はそれを望んでいる。だが人に愛されることを望んだお前は私と言う姿の無い獣を作り出して全てを押しつけた!!この気持ちかわかるかッ」

「…違う」

「否定は私のモノだ。それさえも奪おうとッ」

テッドは長槍を作り出してフランへと襲いかかる。フランは微動だにしないで周りを覆う炎の外殻が長槍を阻んでいた。

「レオンさん…逃げましょう」

「逃げられるかよ。お前だけで逃げてくれ」

「あなたでは勝てません」

「…勝てない？勝つんじゃない。止めるんだよ」

レオンは自らの力の消失を感じながらもフランとテッドの間へ入ろうと駆けだした。案内人も戸惑いながらもリュックの中から使えるような道具を探る。

壊れた盾を押し込んでボーガンの矢を取り出したが人外の戦いに手が止まる案内人は矢も押し込んでリュックの紐を締めて静かに祭壇から逃げようとしていた。

周りを囲んだ壁の隙間から飛びおりればギリギリ縁へ乗つかれる部分を見つけて飛ぼうとするが、直前で足元を見てしまい全身をすくませてへたり込んでしまった。

「フランでもクーパーでもどっちでもいい。教えてくれ。どうすりゃいいんだ？」

レオンはテッドと外殻の間へ身体をねじ込んで交差させた拳底で双方を押し返して距離を離させた。もろにお腹へ喰らった一撃に表情を歪めるテッドとビクともしないフラン。押した掌の方が軽く爛れてヒリヒリとする。

「目を覚ましてくれよ」

「…」

「俺だつて話をしている。自分が自分だつてわかる。テッドだつて負けるんじゃないやねえぜ」

「クッ…っう…」

テッドは丹田の位置を押さえながら立ち上がり低くうなった。

「それにフランも辞める！言いたいことがあるなら話せよ。戦うことを望んでいるわけでもないだろう？」

「戦いを望みません。ですがクーパーの激しい怒りに身を捧げるわけにもいきません。あのような感情に支配されるとこの大地も滅ぼされかねません」

「あのような…お前は何かわかってないぜ。怒りも嫉みも大切な感情なんだぜ。それを分離して必要ない感情だっで見捨てるなよ！！」
「見捨てる…？」

「そうだ。あいつが拒んでいるんじゃないかってお前が拒んでいるんだ。恐れているんだ。自分じゃないって受け入れられていないんだ！！」

レオンの言葉にフランを覆う外殻が反応して蠟が溶けるように姿を崩したが、ややあって元の形状、いやさらに強力で禍々しい姿へと変化していく。角も先端が伸びながらグングンと鋭利になった。

「怖がるなッ」

「…」

「誰だっけ認めたくない感情はある。そいつのせいで面倒なことにもなるもんだぜ。だがそれも自分ってことさ」

「…」

「フラン。精霊は人の心に反応しているんだろう？クーパーの深い愛情が反応した自分の愛情を信じる。きっと愛することが出来るさ」

怖がり、拒絶するほどに力が沸きあがるのをレオンも感じる。狂いそうな力の奔流に酔い始める自己愛が^{ナルシズム}かすかにくすぶる胸の中、爛れた掌でガバツと自らの胸もとを掴んでおさまれと命じる。

フランは長い間、人と接することが極端に少なかったせいで色々な感情をコントロール出来ずにいた。迷い・戸惑い・困惑する感情がふいに外殻を柔らかくさせるがすぐに拒絶し、形状を保とうとす

る。

「うるさいッ」

テッドは声を荒げることで拒絶し、フランは黙ることでも拒絶していた。対照的な二つの意思に挟まれたレオンはそれでも叫び続けた。テッドもフランも失いたくない。火山が噴火して街が消えるのも困る。だからといって戦いたくない。

「選択するのはいつだって何かを失うものならさ、俺の全てを失わせてくれよ。テッドとフランと街の皆を巻き込まずに俺の身体の中で話合ってくれ」

「黙れ!!」

「俺は壊れたつていい。何かを失うくらいなら自らを失うさ。俺はリアム。精霊を宿せる身体なんだろう？ だったら俺の身体をくれてやる」

「…黙れ」

「テッドの肉体から離れるよ。フランからも離れてくれよ。フェリアだって俺の頭の中が気に入っているんだぜ？ 精霊の住み心地は保証するぜ」

かすかに笑みを浮かべて冗談を言うのが正しいことかもわからない。ただ怒りの矛先をレオンに向けてくれれば、と願った。

フランを守ってやる。遠い昔にかわした約束に思える。時間の経過が足りないってんなら言葉で補おう。何度だって守ると誓おう。

「黙れつて言っているんだ!!」

「ッ」

テッドは低い姿勢から地表すれすれを滑るように走り、手に持つ

た槍を突き付けてくる。深く息を吸って剣を捨てたレオンが両手を広げる。

わき腹に強い衝撃があった。視界が歪んで意識が途切れかける。わき腹から燃え広がる炎が全身を黒く染め始めた。全身で怒りを感じる。こんなにも強い怒りを隠していたことを知らなかった。

記憶の中にあるテッドは常に冷静で感情を出さないクールな男だった。まるで別人に触れているみたいにテッドは感情をあらわにしている。

「…ごめんツ…」

レオンは身体をめぐるテッドの感情を得て謝ることしか出来なかった。

「謝るしか出来なくて…こんなに苦しい思いをしていたなんて知らなかった」

「…これ、れお…」

よれよれと力が抜けて自らの肉体も支えられない身体が自然と前に傾いてテッドに寄りかかろうとしたのを抱き締めるテッドの腕。

「本当にごめんツ…テツ…」

痛みすら彼方へ消えた。ただこの胸に伝わる怒りが悲しくて、こんなにも溢れた想いを抱えていたのに甘えていたのを悔んだ。

テッドの回想。

夕暮れが迫るにつれてまばらだが人が増えてくる街の光景。昼間とは違った種類の賑わいに看板にもライトが灯った。様々な色の電飾に群がる旅人はまるで蛾みたいにふらふらと誘われる。

露出の高い服を着る女を中心に人ゴミが出来始めて、五分も経たない内に流れが出来た。当然、劇場にも人が多く流れ込んできて第一公演が始まった。

「寒いな」

近くにあつた布を拾って包まるテッド。日影に長時間いたこともあつて体温はずいぶんと低下していたので全身を掌で擦る。掌も冷えるとはあ、と息を吐きかけて温もりを持続させて再び擦っても寒さには勝てなかった。

砂漠の気温は昼と夜では雲泥の差があり、ひなたでも日影でも差がある。

「あんまりだな」

布は薄くて耐寒にもならないが手放さなかった。すっぽりと頭にかぶせればフードにもなる。人目をしのぐ役割もあつて問題は背丈だった。

小人族に変装しようにも腕や足が細すぎる。獣人族では毛深さが全く違うし、ヌツと付き出た鼻頭もない。

「仕方ない。待つしかないのかな」

テントに背を預けて身体を乗りだし街の様子を眺めた。ざわめき

始める街の様子を察知して誰か有名な戦士がいるのだと推測する。

有名な戦士の一団の姿が見える位置にまで走る。テントとテントの間だがすぐ前には広い路地があつて近づいてこられると影でも子供だということがバレる危険な位置。

戦士たちを囲む女を不機嫌そうに睨む酔いどれの戦士が多くいた。

「おい…お前ら、ガイザーの傭兵だろう？俺とどっちが強いか勝負してくれよ」

「確かにガイザーの傭兵だが争いは辞めておくよ。お金にならない戦いは趣味じゃないんでね」

「何だつて？だったららお金をくれてやるよ。いくら欲しいんだ？ほらッ」

一人の男が札を投げつけて挑発するがガイザーの傭兵は呆れた様子で答える。

「飲み過ぎ…じゃないかな？俺らだつて長い旅で疲れているんだ」

「何だッその言い方はッ。気に食わないね」

「はぁ…手荒い真似はしたくないんだつてば」

「舐めてやがるのかッ」

街でも馴染みの光景だ。毎日誰かが誰かと喧嘩をし始めてそれに野次馬が群がる。

屈強な男に囲まれてもなお、威勢のいい男が殴りかかると周囲を歩いていた男達がやじを飛ばし始めて一気に過熱する。

「今だッ」

テッドはタイミングを合わせて一気に路地へ出て劇場の中へと入った。切符を配る男も喧嘩を苦い顔で見て足元のテッドに気づいて

いない様子だった。

中は丸いテーブルが七つあって椅子だけの席が壁に並んでいる。人の入りはまばらだった。

入口からすぐにはバーカウンターがあつて劇場に背を向ける形で椅子が設置されている。その隅に身を押しこんでいつも角に座るスウィニーに黙っていてくれと目で合図をした。

困った顔のスウィニーはそれでも黙つてスコッチグラスをちびちびと舐めていた。

「間にあつたか」

開演の合図のブザーは鳴っていない。

「また来たのかッ」

太い声が頭上から聞こえてすぐにカウンター越しから手を伸ばしたガタイのいい男にテッドは首筋を掴まれて引き上げられる。

「離せよ」

「レビーの子供だからって何度も許してもらえと思つなよ」

「離せつてんだ」

「はあ…」

そう言つて腰辺りに置いてあつた眠り花をテッドの顔に近づけると途端に眠気が来た。

次に目を覚ました時は教会のベッドの上だった。また母親に会えなかった。どうして？なぜ…会いたいただけなのに…なぜなんだ…。

憶えているのは母親では無い誰かに抱かれた腕の温もりと全身を包むわずかな揺れ。

テッドは起き上がり己の非力さを怨もうとした時、ベッドの隅で

座ったまま眠りこけるレオンの姿があった。

「ッ」

待ってたのか、とレオンに手を伸ばそうとした時、かすかにニオイがした。母親と同じニオイがベッドに乗つけた頭からにおう。

「おい…母が来たのか？」

「ん？…うん？ああ…起きたの？おは」

「いいから答える！！母は？」

のんびりと欠伸をするレオンの肩を何度も揺らして強引に訊ねるテッドの迫力に押されてもなお眠たそうにしているレオンはもう一度眠ろうとした。

「まだいるのかな？さっき来たよ。何かね、色々…うん…」

「クソッ退け」

テッドはレオンを投げてベッドから飛び降りて入口へと向かったが、人の姿はない。まだ夜で遠くに見える街には人の姿がある。

「どうしてなんだ…俺も会いたいのに…」

嘆いた言葉が夜の静寂に吸い込まれていった。

「あの時、母は…テッドに会わなかったんじゃないか…会えなかったん

だよ。会つと余計に辛くなるからって」

記憶なのか、今考えていたことなのか、レオンは見えた光景に対してそう答えた。相変わらず力が入らない身体をテッドに預けている。

「俺を少しだけ抱きしめられてすぐに帰ったよ。寂しそうな顔をして震える腕を憶えているんだ」

「…」

「母だつて一人でいるのもすごく怖かった。すごく弱くてすごく辛かったんだと思う。だから会いたいつて思つて街まで来るテッドに会つてしまつと帰れなくなりそうだったのかな…ごめん…よくわからないんだ」

「勝手な…勝手なことを言つてッ」

テッドはもたれかかるレオンの身体を剥がした。立つて支えられる力もないレオンは勢いよく倒れてしまふ。震える腕に力を入れても上半身さえ起こすことも困難だった。

「怨まないでくれよ。母だつて同じ気持ちさ。会いたくても会えなかった」

それでも力を入れて立ち上がるうとするレオン。

ふるふるすると震える腕に鞭を打つて上半身が起こせると残った力に火がついて立ち上がる事が出来た。

「母もテッドも同じ気持ちなのにどうして怨まないとダメなんだ？」

「違うッ」

「違うないさ。俺は二人とも知つている。二人とも俺の大切な家族なんだ」

「だったら…だったら何故捨てたッ。お前も捨てられたんだぞッ」
「捨てられた…理由があるんだと思うぜ。母を守れなかったのは俺のせいだ。だから捨てたんじゃない…俺の力が足りなかったんだ」

レオンはほんの三歳で何も出来ずにいた。寂しさを埋めることもお金を稼ぐことも漠然とした恐怖を拭うことも出来ない子供だった。子供が母を守りたいって願うことは罪なことなのか。

「仕方無かったなんて言葉は使いたくないケド…俺達は子供で一人で何も出来なかった」

「辞めろ…辞めてくれ」

「認めたくない弱さがあった。愛を憎しみにすり替えても弱さは強くはならないんだぜ。カードの裏が表になるみたいに」

「辞めるッ」

「テッド…お願いだから目を覚ましてくれよ。憎しみなんて悲しいだけだぜ」

強い拒絶にテッドを包む黒ずんだ炎が膨れ上がり続けた。違う、違う、違う、と否定し続ける言葉とテッドの意思がぶつかり合い激しく燃え上がる炎。

その炎はねじれて竜巻になり、熱風を周囲に散らせた。黒ずんだ火の粉も舞い踊る中、テッドは喉が千切れるくらいに叫んだ。

「信じるぜ…テッド」

そう言うてこの成行きを見守るしか出来なくなったレオンは無意識に刺されたわき腹に手をやった。掌を脈打ち流れるのは黒ずんだ炎ではなく、自らの真つ赤な血だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7863x/>

その名も嘘つき勇者様

2011年11月20日19時46分発行